

## リクルールの精神分析論

### ——自己理解の解釈学の展開における因果性と客観性

櫻井 一成

#### 序 自己理解の解釈学の《鏡》としての精神分析論

リクルールの死後、フランスのリクルール協会が「著作と講演」というシリーズ名で新たな論文集の公刊をはじめている。この論文集は、同協会のリクルール文庫に収蔵されている論文や講演原稿をもとに編集されたものであるが、その第一集は精神分析をテーマとして二〇〇八年に出版された<sup>(1)</sup>。一九六六年から一九八八年までのおよそ二十年のあいだに書かれた十本の論文が収録されており、フロイトの心の理論や治療実践<sup>(2)</sup>が長きにわたってリクルールの関心事であったことがわかる。

ただしリクルールのフロイトへの関心が、この論文集によってはじめて明らかにされたというわけではない。フロイト精神分析をめぐる論述は、初期の『意志的なものと非意志的なもの』(一九五〇年、以下『意志的なもの』)において既に見いだされ、一九六五年には長大な精神分析論である『解釈について——フロイト試論』(以下『試論』)が発表されている。また一九六九年の論文集『諸解釈の争い』には五本の精神分析論が収められ、一九七七年に來日した際には「精神分析と解釈学」というタイトルの講演が行われている。さらに『時間と物語』(一九八三―八五年)以降に展開される「物語的自己同一性」をめぐる議論においても、精神分析は重要な参照対象であり続けている。リクルールが言及する思想家のなかでも、フ

ロイトがその頻度と継続性において格別の位置を占めているということは、リクールを知る者にとってはよく知られた事実である。それゆえ上記の論文集は、リクールとフロイトの関係がただならぬものであることを再確認し、強調するものであると言うのが正確だろう。

では、なぜリクールはフロイトを論じ続けたのか。もちろんフロイトへの言及を単一の関心に還元することはできない。だがリクールとフロイトのあいだには問題関心の共有が認められ、リクールにとってフロイトが先駆者にあたるという事實は、この問いを考えるうえで重要な意味を持っている。リクール哲学を「自己理解の解釈学」という観点から全体化することができが、自己理解の解釈学の基本的な発想は自己自身の「不透明性」や「昏さ」である。《自らの欲望は主体にとって完全に見通せるものではなく、行為とそれについての反省を繰り返すなかで徐々に理解される》というリクールの発想、これはフロイト精神分析の発想と通底するものだ。したがってフロイトを論じる上でまず問題となったのは、不透明な自己を理解するという認識論的課題を共有した上で、課題の深さや解決方法に関する相違を把握し、相違を何らかの仕方で処理することであったと推定される。特別の理論に基づいて人間の内なる闇へと潜行し、その闇に蠢く欲望を特別の方法によって明らかにするという実践に加わるべきか否か。リクールが直面していたのはこのような問題であったはずだ。リクールは精神分析論を通して、自己理解という問題を考えていた。それゆえフロイト受容を論じることは、リクールが自己理解の条件や過程を考える際に、フロイトの著作がどのような意義を持っていたのかを明らかにするという意味を持つはずである。

ただし、その意義は見えにくい。リクールが敬虔なプロテスタントであり、宗教学者、聖書学者であることをふまえるなら、リクールとフロイトのあいだに《生産的な対話》の成立を想定することは難しい。宗教を強迫神経症や集団妄想としてその意義を否定するフロイトなど、リクールにとって結局は敵でしかないだろう。リクール思想の形成に、たとえばナベールやフッサールのように、フロイトが重要な影響を及ぼしているとは考えられないのである。実際、はじめて精神分析がまとまったかたちで論じられる『意志的なもの』のなかで、リクールは「私はフロイトの学説、とりわけこのウィーンの心理

学者がその方法論と治療学のために作り上げた無意識の实在論には納得がなかった〔VI 352-3〕と述べ、精神分析に對する懷疑を表明している。それゆえリクールがフロイトから何かを教わったとは思えない。このような事情から、フロイト受容とその意義を、自己理解の解釈学の形成や展開に関係づけて論じるような研究は、これまでに行われてこなかった<sup>(3)</sup>。それでも、精神分析がその意義を完全に否定されているわけではないことに注意すべきである。『意志的なもの』において、リクールは「衛生学の原理 *principe d'hygiène* [VI 382]」に従い、精神分析が治療の効果をあげている限りに對してそれを承認するという立場を採っている。無意識に「物」としての存在は認めないが、無意識について語ることの意義は認めるといふ姿勢である。この姿勢は『試論』にも引き継がれている。そこでリクールは、「無意識を解釈学的配置へと一挙に引き戻すこと [DI 425]」により、精神分析を無意識の实在論抜きで再構成することを試みている——精神分析の本質は「動機づけ」であるとき、非自然主義的で非因果的な解釈学的実践としてのみ、精神分析は存立可能であると言われる。したがってリクルールの精神分析論は、精神分析をこの世から消し去るための試みではなく、精神分析を自然科学から解釈学へと改訂する試みであった。両者が同じ問題関心を共有していることをふまえるならば、この改訂は、自己理解の解釈学の枠組みに収まるように精神分析を矯正する作業であったと言ってもよい。リクールは、精神分析論において自己理解の解釈学を反復していたわけである。

であるとすれば、精神分析論を分析することによって、自己理解の条件や過程について、リクールがどのような考えや構想を持っていたのかを反照的に理解することができる。フロイト受容がフロイトの矯正であるのなら、受容可能とされている精神分析のかたちを知ることが、自己理解の解釈学のかたちを知ることにつながり得よう。精神分析論を、自己理解の解釈学をよりよく理解するための鏡として利用すればよい。

しかも、重要なことに、リクルールの精神分析論には通時的変化が認められる。受容可能な精神分析のかたちが時期によって変化しているということは、自己理解の解釈学のかたちが変化しているということだろう。なかでも際立った変化は、『試

論」と「フロイト精神分析における証明の問題」という論文（一九七七年、以下「証明」論文）のあいだに認められる。そこでリクールは、『説明と理解の二分法』を見直すとともに、解釈の客観的妥当性という問題を新たに主題化しているからである。リクールは、精神分析が理論や実践として矛盾なく成立し有効性を保持するためには、因果的説明や確証基準が必要であると考えているようになっている。

精神分析論の通時的变化においても、精神分析の改訂的受容におけるのと同様に、自己理解と自然科学的説明の関係が議論の焦点になっていることがうかがえる。リクールにとって精神分析論とは、自己理解と自然科学的説明の関係を考える場であった。より踏みこんだ言い方をするならば、リクールが精神分析論を通して考え続けた問題、それは意志的なもの（自由）と身体的な非意志的なもの（身体の必然性）が絡み合うなかで進展していく過程として人間の経験を語ろうとするとき、そのような語りをどのように記述し、分類すればよいのかという問題である。したがって、リクールによるフロイト受容とその意義を考えることは、自己理解の解釈学と自然科学的説明の関係という観点から、自己理解の解釈学の通時的展開を再構成するという意味を持つはずである。

本論文は以上のような構想のもと、リクールの精神分析論の分析を試みる。リクール哲学における解釈学と自然科学の関係という問題もまた、先行研究において論じられることの少ない問題である。本論文はリクールのフロイト受容を論じることににより、リクール研究における二つの空白を同時に（わずかなりとも）埋めるという意義を持つだろう。

ただし本論文は、精神分析論のなかから因果的説明や客観性に関する記述を抜粋し、それらを比較することに終始するものではない。リクールによる解釈学的再構成が、精神分析論として内包している問題点についても考察を加えるつもりである。このような批判的検討を行うことには次のような意味がある。

まず、リクールの精神分析論が孕んでいる問題を明らかにすることは、精神分析論の通時的变化を引き起こした内在的な

理由を明らかにすることであり、自己理解の解釈学が変化した理由の一端を明らかにすることである。また問題解決の程度を分析することによって、自己理解の解釈学の公準や限界を浮かび上がらせることもできるはずである。それゆえ解釈学的再構成の妥当性を検討することが必要となる。

第二に、リクールの解釈学的再構成には厳しい批判が加えられている。その批判とは、科学哲学者であるアドルフ・グリュンバウムによる批判である。グリュンバウムは科学哲学の観点から精神分析の認識論的正当性を論じた著作である『精神分析の基礎』（一九八四年）のなかで<sup>(4)</sup>、『試論』における解釈学的再構成とは、結局のところ精神分析の「去勢」でしかないと言っている。たとえばグリュンバウムは次のように言う。

抑圧に関するフロイトの臨床理論においては、無意識の動機がさまざまな症状と因果的に関係しており、そのことによって自らの存在を症状として発生させていると考えられているからこそ、無意識の動機に言及することが説明として機能するとみなされる。その限りにおいて、いま問題となっているのは、人間の行為を因果的に説明することが健全であるかどうかということではなく、因果的説明なしで精神分析を再構成することが、精神分析を去勢することなしに済まされるのかということである。[Grünbaum 52]

フロイトの無意識の実在性を否定するリクールの議論は、精神分析の科学的性格を否定する議論と連動している。そして解釈学化された精神分析では、科学性の追放にともなって、因果的説明や、観察や実験による検証もまたその居場所を失うことになる。しかしグリュンバウムによれば、精神分析の解釈作業から因果的説明や検証を切り離してしまうことは、精神分析の必然性や固有性を曖昧にし、宙づりにすることでしかない。なぜなら、それは「抑圧を解除するという治療法の因果的根拠を切り捨て、さらには治療効果の原因帰属もやめてしまう」[Grünbaum 60] ことであり、特定の悩みを抱える患者が精

神分析家のもとを訪れるべき理由を説明不可能にすることであるからだ。解釈学的再構成を認めることは「精神分析擁護論の新たな砦となるどころか、保護されるべき遺産に死の接吻を贈ることである」[Grünbaum 56]。たとえ「証明」論文において形式的に因果的説明が導入されるとしても、説明の基礎となる因果仮説を確証する方途が断たれている以上、本質的な問題は変わらない[Grünbaum 68]。

グリュンバウムの批判は、精神分析を脱自然科学化することが精神分析を脱精神分析化することになるという、解釈学的再構成のジレンマを鋭く指摘している。《特定の理論を認識論的に正当化することとは、理論が客観的に確証された科学的理論として成立しているのを示すことである》という前提に立つならば、グリュンバウムの批判は妥当だろう。たしかにリクルールの議論は、精神分析の必然性や固有性を客観的に根拠づけることには成功していない。しかし、その論述を詳細に読むならば、リクルールはグリュンバウムのような批判をあらかじめ把握したうえで再構成を試みているように思える。明晰かつ強力な批判を受けて失敗を確信する前に、そのような批判が看過していた、リクルールの微妙な意図を取り出してみることができるかもしれない。それゆえリクルールの弁護を図るという意味において、進んで解釈学的再構成の成否を批判的に検討することが必要となる。

以下、本論では『意志的なもの』（一九五〇年）、『試論』（一九六五年）、「証明」論文（一九七七年）という三つの著作ごとに節をわけ、それぞれの精神分析論をまとめていく。

第一節では『意志的なもの』の読解を行い、リクルールがそのもとでフロイトと出会うに至った問題を確認したうえで、精神分析がどのような営みとしてとらえられているのか、解釈学的再構成の祖型を把握する。ここでは同時に、精神分析を「動機づけ」としてとらえようとする再構成の試みが「無意識の動機づけ」や「準・因果的説明」という奇形的な概念を生み出していること、また無意識の反实在論が十分に根拠づけられていないことが明らかにされるだろう。

第二節では『試論』の議論を分析する。フロイト精神分析が「懷疑の解釈学」として「信仰と懷疑の弁証法」のうちに定位されていることをふまえ、精神分析がいかなる性格の媒介として自己理解の過程に要請されているのかを分析する。そのことによって承認可能な精神分析のかたちと自己理解の諸条件が浮かび上がるだろう。そこでは同時に、『意志的なもの』以来の奇形的な概念構成が引き継がれていること、「転移」の強調にともなって、共同信仰としての精神分析という新たな問題が議論に胚胎していることが明らかにされる。

第三節では、「証明」論文に認められる二つの大きな変化（因果的説明に関する考え方の変化と、確証基準という問題の導入）をとりあげることによって、『試論』の解釈学的再構成が内包する二つの問題（奇形的概念と共同信仰）がどのように解決されている（いない）のかを考察する。そこでは精神分析論とイデオロギー論が結びつくことによって、共同信仰としての精神分析という考え方が問題として先鋭化していることが明らかにされるだろう。小結においては、リクールがなぜ精神分析を拒絶しなかったのか、その理由について考察が加えられる。

## 1. 『意志的なものと非意志的なもの』における精神分析論

### 1. 1. 『私』の先在性——性格・無意識・生命

『意志的なものと非意志的なもの』（一九五〇年）で問題にされるのは、自然のなかでの自由の可能性である。意志作用は自然の必然性≡非意志的なものに取り囲まれており、それらと整合的な関係に立つことによってのみ自由は可能となる。リクールはこのような事態を「許可とは禁止という障壁の合間を縫って走る狭き道にほかならない」[VI 53]という隠喩で言い表している。すなわち意志作用は非意志的なものとの折衝を必要とし、折衝を通じて可能な行為の道筋が明らかとなる。リクールは、この折衝について「コギトは自らが根差している固有の環境を受け入れ、それと対話することによって生き



る。自我の働きは同時に参加である「VI21」と説明する。「参加」とは「主体身体<sup>(5)</sup>」の運動を通じて現実の秩序に介入し、また現実の秩序を用いることで、自らの目的を現実の秩序のうちに実現せしめることを意味している。一方「対話」とは一般に行爲論でいう「熟慮」を指し、そこでは世界への参加可能性が検討される。世界のどこがどのように利用可能か、またいかなる運動によってどのように世界を変化させることができるのかという観点から、主体は熟慮を行う。

それゆえ意志作用は主体身体能力と、非意志的なものとしての現実の秩序を考慮に入れなければならない。だが、非意志的なものは、身体の外にだけ存在するのではない。意志的行為の担い手である主体身体そのものが、客体身体として意志作用に対する制約となる場合がある。なかでもリクールは「性格、無意識、生命は、非意志的なもの、すくなくとも身体的な非意志的なものの新たな王国の三首脳である」[VI321]と述べ、性格・無意識・生命を主題化している。それらは意志作用が「同意する」よりない、身体的かつ絶対的に非意志的なものである。

たとえば性格については、「私が同意せざるをえない、変化を拒絶する存在の仕方——欲し、意志し、運動する仕方」[VI360]と言われる。性格は作り直しのきかない「本性」や「運命」のようにして、主体の行動を制約してくる。無意識や生命についても同様のことがあてはまる。無意識については「思考には隠されている自発性」[VI354]などと言われ、生命については「私を特定の生活形式から締め出す禁止」[VI406]などと言われている。主体は自分が選択したわけではない傾性やハビトゥスのうちにあり、可能な選択や進むべき方向は、熟慮に先立って枠づけされているということだ。リクールは、意志作用に先立つ《私》の存在を取り出すために、身体的で絶対的に非意志的なものとして、性格・無意識・生命を主題化していると考えることができる。

運命としての《私》に無知であるならば、主体の意志作用はそれに妨害され、裏切られ、目的を実現することができない。だが主体が必然性を理解し、受け入れている限りに於いて、それは意志作用の基礎となる。リクールは「同意することは自然の敵意を自己に転化させ、必然性を自由に転化させることである。同意は必然性へと向かう自由の漸近的な歩みである



「VI 323・4」と言う<sup>(9)</sup>。したがって生命としての《私》、無意識としての《私》、性格としての《私》に同意することが、自らのあり方を自らで決める自由に結びつく。自らはいかなる存在でしかありえないのか、何を求めて生きてきたのかを知ることが、目指すことができ、目指すべきである自己の姿を浮かび上がらせるのである<sup>(10)</sup>。リクールは「古いものを見いだし、自らを既にそこにある者として見いだすことがなければ、私は新しいものを意志することができない」[VI 323]と述べている。

ただし「漸近的な歩み」という表現に注意を向けなければならない。必然性に対する自由の歩みが漸近的であるとは、身体的な非意志的なものを理解し尽くすことはできず、身体的な非意志的なものについての理解が徐々に深まっていくということの意味している。だからこそリクールは「受肉した存在にとって自由は時間的なものである」[VI 130]「自己の認識には時間が重要なのである」[VI 137]と言う。《私》への同意が自由の端緒であるとしても、我々にとってはそのこと自体が努力を要することなのだ。こうして、自由な自己制作という実践的課題のうちに、自己自身の不透明さや昏さを理解するという認識上の問題が出現することになる。

## 1. 2. 無意識の反実在論と精神分析の善用

必然性への同意という文脈において、無意識が登場した。リクールの言う非意志的なものとしての無意識は、「抑圧」や「抵抗」などの心的メカニズムとつねに関係しているわけではない。実際にリクールは「意識の心理学から借りてこられたこれらの事実は、フロイト的無意識によって提起された諸問題の手前にある」[VI 355]と述べている。では、リクールはフロイト的無意識をどのように処理するのだろうか。まず次のような問いかけを通じて、リクールがフロイトに固有の無意識概念をどのようなものとしてとらえているのかを把握することができる。

嘘をつく以前に——つまり他人を欺こうという意図をもつ以前に——、私が考え欲しているものが、私の意識には隠された意味を持っているということ、私がそれに与えていると信じているのとは別の意味を持っているということがありうるのだろうか。後催眠暗示の例が示唆するように、私の決意が偽りの決意であるということ、私が行為に与えている理由が、何らかの秘密の妨害のために意識にのぼらせることができない無意識の動機に関係している、偽の動機であるということとはありうるのだろうか。[VI 352]

フロイト的無意識の存在とともに問題となるのは、反省によって自己自身を見つめたとしても真の自己は見えてこないということ、自己理解はつねに虚偽や誤解を含んでおり、自らをひそかに動かしている動機の何たるかは特別な方法でしか解明することができないということである。自分が本当に欲しているものは抑圧されており、その意識化は抵抗に遭う。症状や強迫行為とは、回帰する無意識の欲望とそれに対する意識の抵抗のあいだで生じた妥協形成の結果である<sup>8)</sup>。そして、神経症や強迫行為から解放されるためには、意識の抵抗を弱めつつ、抑圧の対象となっている欲望や、その欲望の抑圧に関する記憶を解釈を通じて意識化することが必要となる<sup>9)</sup>。

このような心の理論と治療実践について、リクールは「私はフロイトの学説、とりわけこのウィーンの心理学者がその方法論と治療学のために作り上げた無意識の实在論には納得がいかなかった [VI 352-3]」と述べ、懐疑を表明する。だが一方で、リクールは「治療における機能によって定義されるということが、精神分析の善用であり限界である」という「衛生学の原理 [VI 382]」に従い、精神分析が治癒の効果をあげている限りについてそれを承認するという立場を表明する。實在性の否定と有用性の肯定を両立させるリクールの論理はどのようなものだろうか。

リクールは「治療の決定的要因となるのは、外傷的記憶を意識野に再統合することであり、まさしくここに精神分析の核心がある [VI 360]」と述べ、想起を禁じられている欲望や、それに関係する記憶の意識化が精神分析の課題であることを

認める。しかし特定の欲望なり記憶が、症状の原因として意識化に先立って実体的に存在していると考える必要はないということが同時に強調される。「治療は病因となる『記憶』を無意識から意識へと移行させるといのは誤りであって、治療は意識を圧迫する『何か』が存在していた場所に『記憶』を形成する former ように導く [VI 367]」。つまり、どのような欲望が抑圧され、症状を引き起こしていたのかは、事後的にのみ具体化される。にもかかわらず、分析の現在において名指され、形を与えられたものが、それとして既在していたかのように扱われることで、無意識の実在論が成立する。リクールは次のようにも述べている。

覚醒時の言語によって言表される様々な欲望——父親への憎しみ、母親への愛、胎内回帰等——は、精神分析家によって思考され、あるいは患者がそれらを受け入れるときに患者によって思考されている欲望でしかない。(中略)すべてはあ・た・か・も・覚・醒・時・の・意・識・に・よ・っ・て・そ・の・よ・う・な・も・の・と・し・て・思・考・さ・れ・て・い・る・潜・在・的・な・意・味・が、顕在内容の背後にもともと隠されていたかのごとくに進行する。[VI 366]

精神分析は「連想的・象徴的方法 [VI 360]」を通じて、無意識において働く欲望を言いあてる。たとえば、顕在的な夢内容をもとに、そこに隠された欲望を還元する。だが「夢が完全な思考であるのは目覚めている時、つまり私がそれを語るときではない [VI 365]」。無意識の欲望は、特定の症状なり夢なりを理解可能するために仮説的に利用されるものであり、その存在によって症状や夢などが理解可能なものとされる説明の外部では、その存在を単独でとらえることができない。

だがそれでも、そのような無意識の欲望を所有しているという事実を知ることによって、患者の心的現実に変化が生じ、治療効果がもたらされる。治療効果によって解釈は正当化され、患者がそのような無意識の欲望を持っていたことが事実として成立する。このとき治療によって正当化されるのは、特定の解釈だけではない。次のように言われている。

無意識という考え方が持っている説明能力は、イオンや電子に関する物理学の仮説が持っている説明能力に比せられる。そしてこの説明能力に、無意識の仮説が実践において成功を収めているという事実が加担する。すなわち精神分析は診断の技術にとどまるものではなく、回復の技術でもあり、治療が成功することは、実践上の成果の総体によって理論を確証することに等しい。[VI 362]

フロイトの無意識が、イオンや電子などの理論的存在者と並列されている。精神分析は一つの理論体系として、「無意識」や「抑圧」という概念に構成的に定義を与え、それらを用いて神経症や夢などの現象の発生を説明する。それらは心の働きの全体を整合的に説明することができる。ただし精神分析は説明として包括的で整合的であるというにとどまらない。抑圧された欲望が症状を引き起こしているという仮説は、その仮説から導出される無意識の意識化という治療方法を通じて、現実に神経症の治療へと結びつく。したがって、たとえ精神分析理論が、ゼウスによって雷の発生を説明するような神話体系に過ぎないのだとしても、それが自らの説明に基づいて治療という成果（予想通りの現実の変化）をもたらしている以上、精神分析理論を単なる虚構として棄却することはできない。リクールはそうように考えるのである。

そして次の引用からは、治療を自由の回復とし、精神分析を間主観的な解釈を通じて自由を拡大させる実践としてとらえようとするリクールの態度を見て取ることができる。

治療の真の意味は、意識を無意識によって説明することではない。解説者としての他者の意識を迂回することによって、意識が自らに課せられた禁止に打ち勝つことこそ、治療の真の意味である。患者が自身の病気に適合した思考を形成するのを助けるという点において、分析家は自由の助産師である。分析家は患者の意識を解きほぐし、その流動性を取り戻させる。精神分析は精神による治療である。真の分析家は、病んだ意識を振り回す暴君ではなく、回復されるべき自

由に奉仕する従僕なのだ。[VI 376]

三つの点に注意すべきであろう。まず、病気を宣告することが分析家の仕事なのではない。精神分析は、自由の回復に寄与することを本分とし、「可能的意志」という意識の領野を拡張 [VI 361] する限りで承認される。第二に、精神分析は「精神による治癒」であり、孤独な主観は、他者を媒介することによってはじめて、自己誤解を超出することができる。無意識が意識にとって不透明であることを考えれば、その理解に他者の媒介が要請されるのは当然の成り行きだろう。リクルールは別の箇所でも「他者による解釈は、病んだ意識が健康な意識に戻るために必要な迂回である [VI 361]」と述べている。第三に、「意識を無意識によって説明することではない」というのは、意識の働きを「精神物理学」的に説明することへの拒否である。すなわち、意識の働きを無意識の働きに還元し、意識の働きを因果的・決定論的に説明することが、精神分析の課題なのではない。意志作用が無意識の欲望に同意し、未来の行為を決めるという意味においてイニシアティヴは意識の側にある。

《フロイトの無意識は物理的実体としてその存在を直接確認することはできないが、その存在を仮定することによって、心の働きや行動を包括かつ整合的に説明することができる。精神分析は、そのような無意識の欲望に関する解釈を伝達することを通じて、患者の心的現実性へと働きかける。新たな自己理解を得ることによって患者の心的現実性は変化し、患者は必然性への同意にもとづいて、よりよい生へと向かうことができるようになる》。以上が、精神分析についてのリクルールの大体のとらえ方となるだろう。ただし、リクルールの議論には曖昧な点が残る。治療の成功は、欲望の抑圧が症状を引き起こしているという仮説や無意識の实在を確証しうるのではないだろうか。分析家の認識活動からは独立して無意識が存在し、固有のメカニズムにしたがって活動しているという可能性はまだ否定されていない。实在性の否定と有用性の承認を両立させるリクルールの論理を正確に理解するためには、解釈と理論の関係をより詳しく分析する必要がある。

### 1. 3. 「非意志的な動機づけ」と因果的説明

右に引用した「治療の真の意味は、意識を無意識によって説明することではない」という主張から、リクルルがなぜ無意識の存在を否定しようとするのか、その理由を推察することができる。リクルルにとって、無意識に実在性を与えることと、人間の行動が還元主義的・決定論的に説明されることは連動しており、意識について「自然主義的で因果的なパースペクティヴ」[VI 371]を採用するならば、意志作用の居場所はなくなるとリクルルは考えているのである。そのような考え方は、次の引用にはつきりと表れている。

もし無意識が純粹に「物」でしかなく、決定論という法則に従っている諸対象と同質の本性を持つ「実在」であるのだとすれば、意志や自由という上部構造が存在する余地などなくなり、人間は余すところなく決定論の支配下に置かれることになるだろう。フロイト主義者たちは、まさしくそのように人間の精神現象を解釈する。フロイトの全著作は、意志と自由の局面に対する猜疑心を放散している。[VI 376]

このように述べるとき、リクルルは自然主義的で因果的なパースペクティヴによる説明が不可能であるとか、間違っていると述べているわけではない。リクルルは「自由の主観的経験を経験的客観性の次元において表現しようとする試みを、経験的客観性のもつ諸法則がことごとく打ち負かしてしまうというのは、自然なことであるし当然のことでもある」[VI 16]と述べ、自然主義的な説明の正当性と強力さを認めているからだ。むしろリクルルが言わんとしているのは、「非意志的なものと意志的なものの関係を理解するためには、一人称としてとらえられたコギトが自然主義的態度から絶えず奪回されている必要がある」[VI 12]ということであり、意志や自由に関係するものとして無意識をとらえようとするなら、無意識を「物」としてとらえるような自然主義的態度をとることはできないということである。そして人間の行動を「物」としての無意識

（リクルールは「印象的質料」「知覚下、記憶下、感情下の要因」[VI 364]などの語を用いている）によって説明するとき、意志作用不在のまま説明は完結してしまふ。それゆえ、リクルールが批判しているのは、精神分析における治療とは自由を回復することであるはずなのに、フロイトは還元主義的で決定論的な因果説明を導入することによって、意志を無力化してしまっているという矛盾であると考えられる。

では、精神分析は何をどのように説明すればよいのか。「我々は動機づけの二つのモード、すなわち意志的な動機づけと非意志的な動機づけを合致させることができるだけで、諸物のあいだに働く因果性と意志的な動機づけを合致させることはできないのである」[VI 373]という主張が示唆するように、精神分析の仕事は、患者の非意志的な「動機」を理解することである。つまり、無意識は原因Ⅱ物としてではなく、動機Ⅱ意味として意志作用に関わる。

リクルールによれば動機と原因は異なる。原因は結果を決定するが、動機は行為を決定しない。動機とは特定の行為を遂行することを正当化する理由として、主体によって選択されるものであり、選択された限りにおいて主体を動かす<sup>(10)</sup>。このとき動機の選択は価値の選択であり、選択された価値は、行為がそれへと向けられるところの目的として把握することができる。それゆえ動機を理解することは、ある行動を特定の目的の下に包摂し、行動を目的の観点から再記述することである。したがって「非意志的な動機づけ」を理解することとは、患者が無意識のうちに選択している目的を連想的・象徴的解釈を通じて明らかにし、その目的によって行動を意味づけることであると考えられる。たとえば《あなたは知らず知らずのうちに彼を打ち負かすことを目指して行動している》など。無意識の欲望とは、症状や夢に与えられる「意味」ないし「志向的内容」であり、それと同一であるような「物」を患者の身体内に探そうとしても、そのような「物」を見つけることはできない。リクルールが無意識は実在しないと言ふとき、考えているのはこのようなことである。

ところが、症状や患者の発話をもとにして隠された動機を解釈し、その伝達と理解によって患者の心的現実性に変化が生じるのだとしても、フロイトの局所論や力動論が前提とされているのでなければ、精神分析の固有性は消滅し、残るのは間



主観的な状況で行われる、欲望や過去についての語らいだけということになってしまふ。明らかにすべきは病因であり、抑圧された欲望である。《抑圧によって無意識へと送られ、回帰しようとしても意識の抵抗に遭い、それゆゑ妥協形成的に何らかの症状を引き起こしている、原因としての欲望》。解釈が同定するのは、そのようなものとしての動機にほかならない。リクルは「無意識の『メカニズム』は本質的に抑圧の『力動論』に結びつけられなければならない。準・物理学言語を欠くとすれば、心のなかの諸葛藤についてどうやって語ることができるというのか[V1374]」と言い、精神分析にとっての局所論や力動論の必要性を認めている。それゆゑその解釈学的再構成もまた、「自然主義的で因果的なパースペクティヴ」と完全に手を切ってしまうわけにはいかない。

その結果、「準・物理学言語」や「無意識の諸機制と力動論は物理的自然のようなものだ[V1376]」などの曖昧な表現が議論に登場する。動機づけの作業そのものを構成することなく、真正の因果的説明とみなすこともできないような説明を、解釈学的精神分析は要請せざるをえない。因果的説明は実在する「物」に対してのみ可能な説明とされているから、(心的なものとしてとらえられる限りでの) 無意識の動機を説明項とした説明を因果的説明と呼ぶことができないのだ。そしてこれと同様の収まりの悪さは、「非意志的な動機づけ」という概念についても言うことができる。無意識の意図や、無意識の動機という言い方は、「意図」や「動機」という概念の構成規則と齟齬をきたすことなく、可能なのだろうか。

無意識の欲望は、いわば準動機であり、準原因であるという位置づけを与えられている。『意志的なもの』の精神分析論の背後にあるのは、①原因の言説においては、物理的に実在するものについてのみ、決定論的な説明がなされる、②人間の意志作用を語りうるのは理由(動機)の言説である、③理由の言説と原因の言説は区別されなければならない、併用不可能である、④意志の自由を拡大させる限りにおいて、精神分析は意義をもつ、⑤抑圧や抵抗のメカニズムについての説明を欠けば、精神分析の固有性は失われる、などの前提である。これらの前提が《無意識の動機》という発想や、《無意識についての準・因果的説明》という、奇形的な概念を生み出している。

しかもこのような前提に立つとき、リクールは《無意識の欲望とは行為に与えられる意味であり、そのような欲望が「物」として単独で存在しているわけではないのだから、その働きについての説明は準・因果的である》と言うにとどまっている。つまり、リクールは無意識のメカニズムについての説明が科学的に間違った説明であることを論証しているわけではない。だが、「準」とはただちに偽を意味するわけではない。もしフロイトの理論が正しいのだとすれば（リクールは「治療が成功することは、実践上の成果の総体によって理論を確証することに等しい」と述べ、そのような可能性を認めていた）、無意識は「物」としても実在するということになるのではないか。無意識の欲望が「意味」であると言うだけでは、それと同一の「物」として、無意識の欲望が実体的に存在している可能性を否定することはできないように思われる。無意識についての準・因果的説明に対する評価が確定していないために、無意識の実在性をめぐる議論もまた、曖昧さを残している。

『意志的なもの』に続く『フロイト試論』では、奇形的概念という問題が引き継がれつつ（第二節五項）も、精神分析の非科学性については新たな考察が加えられることになる（第二節六項）。次節では、この変化が新たに引き起こす問題も含め、『試論』における解釈学的再構成の詳細を見ていくことにしたい。

## 2. 『フロイト試論』における精神分析論

『試論』（一九六五年）の議論は、精神分析を自己理解の解釈学に必要な媒介者として論じる一方で、精神分析を自己理解の解釈学として改訂するという二重の議論構成になっている。精神分析に媒介としてどのような役割が期待されているのかを分析することによって、承認可能な精神分析のかたちと、自己理解の諸条件を具体化するという方向で考察を進めることにしよう。

## 2. 1. 「信仰と懷疑の弁証法」とその多義性

『試論』の序論において、フロイトはマルクスおよびニーチェと並べられている。三者に共通して見いだされるのは「意識を全体として『虚偽』意識とみなそうとする決意」であり、彼らはデカルト的な「事物についての疑い」から「意識についての疑い」へと懷疑の歩を進める[DI 4]。つまり意識の意識自身に対する透明性を否定し、自己についての素朴な理解が幻想であり、誤解であることを暴露するのである。意志論の文脈で言えば、三者はそれぞれの仕方、主体を動かしているのが主体自身ではないこと、自由な意志なるものが幻想にすぎないことを暴き立てたということになる。

『意志的なもの』の議論からも明らかなように、このような暴露に対して、リクールは自由な意志をむやみに肯定するわけではない。リクールは自己自身の不透明性を認め、身体的必然性への同意を、意志の自由の必要条件としてとらえていた。それゆえフロイト的懷疑は不透明な自己を理解する《方法》として、むしろ自己理解の解釈学に導入されることになる。『試論』のリクールは、「懷疑の解釈学」に対して「言語への信頼」[VI 38]にもとづいた「意味を回復させる解釈学」を対置しつつ、これら二つの解釈学によって自己理解の解釈学の全体が構成されると主張している。たとえばリクールは次のように述べている。

懷疑の反対は信仰であるとりあえず言っておこう。ではいかなる信仰だろうか。たぶんそれは、もはや素朴な信者の第一の信仰ではなく、解釈学者の第二の信仰、批判を経由した信仰、批判後の信仰であろう。(中略)それは解釈するがゆえに合理的な信仰であるが、解釈を通じて第二の素朴さを求めるがゆえにやはり信仰である。[DI 36-7]

素朴な信仰は懷疑的な解釈による批判を経由することを通じて、「第二の素朴さ」へと到達しなければならない。では、なぜ批判が必要なのか。リクールは「象徴的素朴さ」[DI 27]について、それは「いかなるミュースも、明らかにされること

を求めているロゴスを含んでいる [ibid.] と考える態度であると述べている。つまり素朴な理解においては、ロゴスへの期待がミュトスのうちに何らかのロゴスを見いだすことを可能にしている。それゆえ素朴な理解は「信じる」として理解することのあいだの解釈学的循環 [DI 37] のうちにある。だがこのような循環は、信仰や期待に支えられてはじめて理解される何ごとかが存在するという可能性を示唆する一方、自分が期待しているものを無理矢理に、言語のうちに読み込んでしまうという暴力の可能性も示唆している。それゆえ、先行理解の暴力によって、言語に内在するロゴスが破壊されたり無視されたりすることがないように、素朴な理解は懐疑による批判を経由しなければならない。

では、フロイト精神分析は自己理解の過程において、具体的にどのような批判を行うことが期待されているのだろうか。この問いを考える上で、予め次の二つの点に注意しておく必要がある。

まず、懐疑の解釈学と信仰の解釈学の関係は、弁証法的関係である。信仰のためには懐疑が必要であるというのは、見方をかえれば、信仰への欲求こそが人を懐疑へと向かわせる、ということでもある。リクールに言わせれば、懐疑は信仰をよりよいものにしようとする関心に動機づけられている。それゆえ、意味を回復する解釈学にとって懐疑の解釈学が必要であるというだけではなく、懐疑の解釈学もまた、意味を回復する解釈学を前提としている。「解釈学」として成立している以上、意味を回復する解釈学も懐疑の解釈学も、強調点が異なるだけで、本質としては同じ営みなのである。懐疑を目的とした懐疑は解釈学とは呼ばれない。フロイト精神分析は懐疑の解釈学として弁証法の一翼を担われるが、弁証法のうちに定位されている限りにおいて、結局それは自己理解の解釈学に止揚される。

第二に、上記引用は宗教学的表現を用いつつ、解釈や理解に関する一般的言明として主張されたものである<sup>(1)</sup>。したがって、信仰と懐疑の弁証法が、フロイト精神分析に対してどのような意味で適用されるのかは自明ではない。「言語」や「意味」、「期待」や「信仰」、「批判」や「還元」などの語が、自己理解の過程において意味するものは多義的でありうる。実際リクールは『試論』において、信仰と懐疑の弁証法の多重性をはっきりと分節することなく、渾然とした議論を展開している。し

たがって、『試論』における精神分析受容を把握するためには、そこで信仰と懐疑の弁証法が内包している複数の弁証法を腑分けし、把握するという作業が必要かつ有効となる。フロイト精神分析がいかなる弁証法のうちに定位されているのか／いないのかを明らかにすることによって、リクールが精神分析をどのようなものとして承認しているのかが明らかとなるだろう。それはまた、自己理解の諸条件を具体化することでもある。

## 2. 2. 自己理解と他者理解の弁証法

リクールは『試論』のなかで、十五年前の『意志的なもの』の議論を振り返って次のように述べている。

『意志的なものと非意志的なもの』における、意志の哲学の結論を合流させよう。そこで私は、性格、無意識、生命は、絶対的に非意志的なものの形態であると述べた。それらは、私の自由が「ひたすら人間的な自由」であること、つまり動機づけられ、受肉し、偶然的なものとしての自由であることを確信させる。私は、自らがもつ存在しようとする欲望のうちに既に措定されているものとして自らを措定する。そこで「意志することは創造することではない」。この結論を私はいまでも正しいものと考ええる。しかし、ある決定的な点において私はこの結論を乗り越えており、この点が本作の全探求を動かしているのである。反省と連結された解釈学的方法是、私が『意志的なもの』において実践していたような形相学的方法よりもずっと先に進んでいる。コギトが欲望の措定に依存していることは、何も媒介しない経験において直接的に把握されることはなく、対話に呈示された一見無意味な記号にもとづいて、他者の意識によって解釈されるのである。[DI 443]

リクールは『意志的なもの』において、決意や熟慮などの形相を剔出する「純粹記述」を行った。たとえば熟慮の本質とは、

外的現実の遷移、時間の進行、主体の能力などを考慮に入れながら、目的を実現させるための計画を構想することであり、その一環として身体的かつ絶対的に非意志的なものを理解することが求められた。このような形相的方法を用いて『意志的なもの』が明らかにしたのは、自己制作の自由という実践の問題が自己理解という認識の問題と分かちがたく結びついているということであった。既にある《私》を理解することが自由を可能にする。ただし形相学的方法が明らかにするのは諸概念の構成規則にとどまり、既にある《私》をどのように理解するのかという、具体的な方法を論じることはできない。リクールが引用の前半において指摘しているのはこのことであり、リクールは続く部分で、自己理解が解釈であること、そして『試論』が自己解釈の方法や条件を論じた著作であることを明らかにしている。このとき自己解釈の条件として取り上げられているのは、「対話」や「他者の意識」である。既にある《私》を正しく理解することは、主体一人でなしうるのではなく、他者による解釈を必要とする。

リクールが、精神分析をモデルとした上で、自己解釈の一般的な条件を提示していることは明白であろう。他者とは、患者とともに間主観的状况を作り上げる分析家のことだ。「一見無意味な記号」と言われているのは、夢や症状などの非合理的な所産のことである。夢や症状に隠された無意識の欲望を、対話を通じて浮かび上がらせるのが精神分析的解釈である。そして分析家によって明らかにされた欲望や過去を、自らの欲望や過去として受け入れることによって、患者の自由は回復する。リクールは精神分析から、自己理解が誤解を含んでおり、誤解から抜け出るためには他者の言語の理解が必要であるということを学んだと言えるだろう。このとき他者の介入は、孤独な主観のナルシスティックな自己理解に対する批判の契機としてとらえられる。リクールは、他者を介した自己理解の変化を「新たな脱中心化」「新たな放棄」「精神」などと呼んでいる [DI 444]。

ところで他者を、直接的な対面状況にあるような個人としての他者に限定せず、同じ文化や伝統に属する不特定多数の他者としてとらえることも可能である。『試論』の冒頭では、自己理解が「文化のうちに散在している不透明で、偶然的で、

多義的な記号「D<sub>5</sub>」を媒介しなければならないことが主張されている。つまり、自己理解は自己と他者がともに含まれるような文化的世界の存在を前提とし、その内部で行為や所産の意味を解釈することである<sup>(2)</sup>。それゆえ、信仰と懐疑の弁証法は、自己理解と他者理解の弁証法であり、自己理解と文化理解の弁証法へと連続していると考えることができる。

## 2. 3. 過去理解と未来理解の弁証法

リクールは懐疑と信仰の弁証法を「始源論と目的論の弁証法 dialectique de l'archéologie et de la téléologie [DI 445]」として再定式化している。言葉の選択が示すように、始源論と目的論の弁証法には「古いものを見いだし、自らを既にそこにある者として見いだすことがなければ、私は新しいものを意志することができない」という、『意志的なもの』以来の過去理解と未来理解の弁証法が流れ込んでいる。

もちろんフロイトは始源論の側に立たされる。そしてリクールはフロイト精神分析による「後退 [DI 475]」を自己理解にとって必要な媒介して承認する。だが「フロイトが求めるのは、疎外されていた意味を自らのものとすることによって、被分析者が自らの意識野を拡大し、よりよく生きること、そして少し自由になり、可能であれば少し幸福になることである [DI 43]」という一節が示すように、フロイトの後退は後退のための後退ではないことが強調される。それは意識を拡大し、前進するための後退である。よりよく生き、幸福になるという関心がなければ、抑圧された過去に直面するという作業は果たされない。フロイト精神分析は治癒へと向けられている。

『意志的なもの』において、「フロイトの全著作は、意志と自由の局面に対する猜疑心を放散している」と批判されていた。フロイト精神分析は、それが潜在的に含んでいる目的論を強調されることによって、新たに弁証法的関係のうちに取り込まれ、自己理解の解釈学へと転化したわけである。他者理解と自己理解の弁証法においてリクールがフロイト化したとすれば、過去理解と未来理解の弁証法においてはフロイトがリクール化したと言うことができるのかもしれない。



## 2. 4. 説明と理解の弁証法と『試論』におけるその不在

一九七六年の著作『解釈理論』における次の一節は、懐疑と信仰の弁証法が「説明と理解の弁証法」へと展開していることを示している。

「説明と理解」の弁証法を、まずは理解から説明への運動として、次に説明から理解への運動として記述することにした。第一段階において、理解することは全体としてのテキストの意味の素朴な把握となるだろう。第二段階において、理解することは説明の手続きに助けられて、理解のより洗練された様式になるだろう。[T 74]

素朴な理解が「説明の手続き」によって洗練された理解になることが言われている。この行程は、本節冒頭において紹介された、第一の素朴さが批判によって第二の素朴さになるという行程に合致している。

では説明の続きとは具体的にどのような手続きであろうか。上記の引用はテキスト解釈について言われたものであり、そこでは構造主義言語学をモデルとした「構造分析」が説明の役割を担うものとされている<sup>(13)</sup>。ただし、ここでは構造主義や構造分析そのものより、構造主義の説明が科学的説明として扱われているという事実が重要である。リクールは「構造主義は科学に属する[SH 33]」と言う。つまり説明とは科学的説明のことであり、テキスト解釈においては構造分析がそれを代表していると考えることができる。そしてリクールは科学的説明について次のように述べている。

解釈は特有の主観的共示性を有している。この主観的共示性があらわしているのは、理解の過程の中に読者が含み込まれているということ、テキストの解釈と自己自身の解釈には相補性があるということである。この相補性は、解釈学的循環という名の下に知られている。それは、物事の科学的説明を特徴づけるとされる、ある種の客観性や非含み込みと

の際立った対立を意味するものでもある。[MPCH92]

テキストを読むことと自己自身を読むことはつながっている。否定的な含意を強調して言えば、テキストの解釈は読者の関心や期待によって統制され、テキストの理解は理解したいことの確認、既に理解していたことの反復に終わる。このような循環に批判の契機を導入するのが科学的説明であり、それは解釈の客観的妥当性を検証し、主観的思い込みから距離を取ることを可能にする。解釈する個人の差が捨象され、抽象的で普遍的な視点からの理解が目指されると言ってもよい<sup>[1]</sup>。

ただし批判の必要性を訴えるとき、リクールは解釈学的循環から抜け出ることを要求しているわけではない。期待や先行理解がなければ、何かを理解することはできない。リクールが要求するのは、循環が暴力や反復に陥ることなく、螺旋的循環になることである。テキストを読むことが先行理解の拡張や更新に結びつくかもしれないとき、先行理解がその潜在的能力を圧殺してしまわないために批判が求められる。

かくして懐疑と信仰の弁証法は、説明と理解の弁証法へと展開する。精神分析が懐疑の役割を担うというのであれば、精神分析は信仰のうちに科学的説明によって客観性を導入することになりそうである。だが『試論』において精神分析が科学的説明と見なされることはない。

『試論』のリクールは「精神分析は科学理論としてのもっとも基本的な要件さえも満たしていない」という科学哲学者たちの主張に同意し、「精神分析は観察科学ではない、なぜなら精神分析は解釈であって、心理学よりもむしろ歴史学に比すべきものだからだ」[DI338]と主張している。同時期に書かれた別の論文（「解釈における技術と非・技術」一九六四年）でも、「精神分析は観察科学の諸基準を満たしておらず、それが取り扱う『事実』は、複数の独立した観察者によって検証可能ではない」[TNI185-6]と書かれている。科学とは観察可能な事実にもとづいて説明を行うものであり、観察によっ

て検証可能な説明のみが科学的説明とされる。だが精神分析の事実（無意識に関する事実）は観察によって得られたものではないし、観察によって真偽を決定することもできない。それゆえ精神分析は科学ではなく、フロイト的無意識も実在しない。では精神分析における「事実」とは何か。

リクールは精神分析の事実について、「精神分析では、理論が自らの生成する事実に関して構成的役割をもって [D1420]」おり、「無意識の実在は、絶対的実在ではなく、無意識に意味を与える操作と相対的なのである [D1423]」として、事実が理論や解釈に基づいて作り出されることを指摘する。さらにリクールは「無意識は他者によって、解釈の規則にもとづいて、実在として作り上げられる」「所与の意識が無意識を『所有する』のは、解釈学の規則に対して、また他者に対してである [D1424]」と述べ、精神分析の事実が分析家の解釈を通じて、間主観的状况において構成されることを指摘する。しかも分析家と患者の関係において、分析家への「転移」が生じなければ治療は成功せず、事実の構成も完成しない。分析家への情愛に支えられることによって始めて、患者は自らが何らかの抑圧された欲望を所有していることを承認することができる（詳細は本節五項において述べる）。かくしてリクールは、精神分析の諸事実は「①解釈の規則によって、②分析の相互主観的状况によって、③転移の言語によって構成される総体 [D1425]」であるまとめる。精神分析が明らかにする欲望や記憶は、分析家と患者が構成する間主観的状况を離れるならば、その現実性を失う。それにもかかわらず、無意識の欲望なるものが客観的に実在すると考えるならば、「終了した分析によって生み出された最終的な意味を、事後に無意識のなかに投げ入れる素朴実在論 [D1426]」に陥ることになるだろう。

このように『試論』では、科学的説明の特徴が観察による検証に求められた上で、『無意識とは観察を通じてその存在を確認することができず、また無意識の事実とは事後的かつ間主観的に構成される「意味」であるから、無意識は物理的に実在しない』という議論構成がとられている。非科学性が反実在論の根拠として新たに加えられたわけである。

また『試論』では、精神分析の解釈が意味の理解であることに關しても新たな考察が加えられている。精神分析の解釈は

新たに歴史学の実践と関連させられ、精神分析は「歴史的動機づけの理論」や「人間の行動の理由を理解しようとつとめる歴史学 [DI 333]」とより深い関係を持つと言われるようになっていくからだ。歴史的動機づけとは、回顧的視点からの動機理解を指しているが、リクールはそのような動機理解を歴史科学と関係づけて次のように述べている。

歴史を科学と呼ぶことができるのは、自然科学において規則性が理解させてくれるように、歴史科学においては類型が理解させてくれるからなのである。しかし、歴史科学の問題領域と自然科学の問題領域は一致しない。精神分析における解釈の妥当性は、歴史的解釈もしくは訓古学的解釈の妥当性と同じ種類の問題を招来する。 [DI 365]

動機づけとは、たとえば特定の行動を「嫌悪」や「嫉妬」などの「類型」に包摂することである。「嫌悪」や「嫉妬」などの概念は《しかしかの状況に置かれていたならば、……するだろう》という行動の過程についての図式を持っており<sup>(15)</sup>、現実の行動の過程がそれらの図式と合致することで、行動は「嫉妬」という動機に包摂される。自然科学の説明力が出来事を特定の因果法則へと包摂することに由来するとすれば、歴史科学の説明力は行動を特定の類型へと包摂することに由来している。ただし自然科学の法則とは違って、動機語の種類や動機語の図式は、時代や文化によって変化する。つまり行動にどのような意味を与えるかは、行動の主体が属する時代や社会に依存する。それゆえ特定の文化的状況において動機概念をリストアップし、行動を何らかの動機概念に包摂することが歴史科学における解釈となる。そして精神分析の解釈は、このような歴史科学における解釈と相同的である。精神分析は、たとえば「無意識の嫉妬」という非意志的な動機語の図式を把握し、特定の症状や夢をそのもとへと包摂することによって、それらを理解する。

このとき歴史科学に属すると言われることを根拠に、精神分析に「説明」の役割が期待されていると考えることはできない。説明と理解の弁証法における科学的説明とは、普遍的な視点から、理解の客観的妥当性を検証するものであった。

特定の文化的・間主観的状况に依存している限りにおいて、歴史的動機づけとしての精神分析は、むしろ批判を受ける側に立たされる。しかも精神分析の事実は「複数の独立した観察者によって検証可能ではない」とされているわけだから、精神分析の実践にそもそも客観性の成立する余地はない。『試論』における懷疑と信仰の弁証法を、説明と理解の弁証法としてとらえることはできず、そこには説明と理解の弁証法が不在である。

## 2. 5. 解釈学とエネルギー論の弁証法

『試論』の論述に従えば、精神分析における解釈とは「歴史的動機づけ」の作業であり、「理解」の系に位置づけられる。だがリクールは精神分析を動機づけの作業に還元することができると考えているわけではない。精神分析には「解釈学とエネルギー論の弁証法」が認められ、エネルギー論が精神分析の固有性を構成する。

精神分析は神経症や夢を「テキスト」とみなし、歪曲された表現に込められている潜在的な「意味」を解読する作業である。表現と隠された欲望のあいだの関係は、因果関係ではなく意味論的關係であり、この点において精神分析は解釈学である。たとえば解釈は「縮合」や「遷移」によって歪曲された夢内容を、自由連想法を用いて逆向きにたどる。だが、そもそも夢の顕在的内容にそのような歪曲が生じたのかを考えると、精神分析は抑圧された欲望がそのような歪曲を引き起こしているとして、力学的説明に訴える。すなわち「意味と意味のあいだの分離を説明するのが、エネルギー論的隠喩の機能である」[V383]。力の存在を仮定し、心的諸力間の葛藤の結果として症状や夢を把握することが解釈を可能にする一方、解釈を通じた意識化のみが諸力の葛藤にアプローチすることを可能にする、という弁証法的關係が精神分析を構成する。リクールは次のように述べている。

フロイトの著作ははじめから、混合的なディスクールとして、つまり両義的なディスクールとして現れている。一方で

はエネルギー論に属する力の葛藤を語り、他方では解釈学に属する意味の関係を語るのだ。この目に見える両義性にはきちんとした根拠があること、混合的なディスクールであることが精神分析の存在理由であること、私としてはこれらのことを証示したいと思う。[DI 75]

だがここで言われるエネルギー論とは、やはり準・因果的説明である。「精神分析の説明は因果的説明に似てはいるが、それと同じものではなく、両者を混同するとなれば、精神分析は概念をすべて物象化し、解釈そのものを神秘化することになる [DI 352]」と言われているように、物理的に実在するものについての因果的説明が可能であるという考え方は、『意志的なもの』から変わっていない。

さらに、因果の言語と理由の言語が同一平面では共存しえないという考え方についても、『試論』の議論は『意志的なもの』のそれを引き継いでいる。「原因言語の動機言語への翻訳 [DI 354]」や「分析理論における解釈学とエネルギー論の二重写し surimpression [DI 359]」などの表現からは、リクールが意味論的視点と因果論視点の関係を、平行的関係としてとらえていることが看取される。二つの言語は異なる世界を、異なる言語、異なる論理で語る。両者のあいだに対応関係を見いだすことは可能であるが、一方の視点から行われる語りのなかに他方の語りの視点が混同されることはなく、解釈それ自体が準・因果的説明を含むことはない。このことは、動機づけが類型への包摂としてのみ説明されていることによって明らかだろう。したがって『試論』でもエネルギー論は、解釈が明らかにする動機が一方で《抑圧によって無意識へと送られ、回歸しようとしても意識の抵抗に遭い、それゆえ妥協形成的に何らかの症状を引き起こしている、原因としての欲望》であることを言い表すために要請されていることがわかる。

ただし『試論』では、エネルギー論的視点に関わることからとして、新たに分析における「転移」の重要性が強調されるようになっていく。

フロイトによれば、過去を意識化することに対する抵抗が患者のうちに存在している限り、分析家による解釈は治療に結びつかない。患者が、再構成された過去を自らの過去として、「この過去において自己認識する [D1 400]」ことを受け入れなければ、解釈は効力を持たないのである。このとき患者の抵抗を無視するならば、解釈の伝達は抵抗をかえって強化することになる。それゆえ精神分析には、解釈のほかに「治療の力学」が存在する。リクルールは次のように述べている。

解釈の伝達は、それを意識化の作業に組み込むことができはじめて意義をもつ。あまり早くに行なわれるならば、伝達は抵抗を強化するだけである。治療の力学が存在するのであって、この力学に従えば、理解という純粹に知的な要因は、抵抗の解消の役に立ち、抵抗の解消に従属する限りにおいて、作業に組み込まれる。[D1 400]

精神分析とは「活動の変化を引き起こすための技術 [D1 34]」であるということ、つまり治療の主眼は意識化に対する抵抗を弱めることにあり、解釈とはそのための技術の一つであるということが言われている。解釈は治療の必要条件ではあるが、十分条件ではない。分析家にはほかに、患者の抵抗の具合を読み取るという作業が求められる。

とはいえ、解釈は抵抗が弱まっているときにのみ受け入れられ、そのときにのみ抵抗を弱めることに寄与するのだとしたら、はじめに抵抗の弱体化を引き起こしているのは何なのか。たしかに解釈によって過去を意識化することなしには治療は成功せず、分析家の解釈を受容することこそが、病因と症状の解消をもたらす。しかし、そもそも抵抗が弱まることがなければ解釈は受け入れられず、治療効果を持ちえない。無意識の意識化と抵抗の弱体化は同時進行的で相補的な関係に立っている。いわゆるデッドロックだ。このとき分析家が患者の抵抗の程度を読み取ることと、解釈しそれを伝達することのほかに技術を持ち合わせていないのだとしたら、分析家にできるのはたまたま抵抗が弱まるのを待つことだけだろう。何か手立ではないのか。



分析家はデッドロックにアプローチする技術を持っており、リクルールはそれを愛の転移を操作する技術と呼ぶ<sup>(16)</sup>。転移とは、かつての葛藤状況において誰かに向けられていた様々な感情が、分析家に対して反復的に向けられるという事態を指す。感情の発現の仕方次第で、無意識の意識化に対する抵抗の度合い、言い換えれば解釈に対する受容性は変化する。情愛的関係が成立している陽性転移の状態においては、患者は分析家を権威として承認し、その解釈を進んで受け入れる。だが陰性転移の状態においては全く耳を傾けない。したがって「分析技術のデリケートな点は、愛の転移を、満足させないで用いること」[D1404]にあり、治療はできるかぎり「欲求不満や禁欲」の状態でなされる必要がある。陽性転移を維持することによって——デッドロックに外側から働きかけることによって——、欲望や記憶の意識化と抵抗の弱体化の相補的進展を推し進めようということだろう。情愛的関係にもとづいて分析家の解釈を受け入れ、事実の承認が治療効果を生んだとき、そのことは抵抗の弱体化と、分析家の権威の再認に結びつく。そして抵抗の弱体化と権威の再認は、解釈の受け入れをより容易にし、さらなる治療効果を生み出す。

転移の技術は、「抑圧」という考え方そのものが論理的に要請する技術である。自らの与り知らぬ過去に関して「この過去において自己認識する」ためには、他者による解釈が不可欠であるし、自らが意識化したくない過去に関して「この過去において自己認識する」ためには、他者への信頼や愛が不可欠である。転移こそが、孤独でナルシスティックな主観性の領域から、間主観性の領域への超出を可能にする。リクルールは転移を操作する技術に、精神分析を単純な動機づけに還元することのできない明白な根拠があるとし、精神分析における解釈学とエネルギー論の弁証法の成立を説く。

『試論』におけるエネルギー論の承認は、「自己理解の解釈学」についてのリクルールの理解と無関係ではないだろう。意志作用に対する身体的な非意志的なものの介入を語る上で、また自己誤解の反復から抜け出るための条件を論じる上で、エネルギー論的視点は自己理解の解釈学にも必要とされる。ただし『試論』のリクルールにとっては、準・因果的説明で十分であった——準・因果的説明が限界であった——。そのことが『試論』の議論に二つの大きな問題を引き起こしている。一つ

は以上に述べた奇形的な概念構成であり、もう一つは、精神分析の非科学性とエネルギー論（転移）の強調が組み合わさることによって生じる、精神分析の固有性と必然性の宙づりである。次項では第三節の議論との連続性を視野に入れ、第二の問題を主題化しておくことにしたい。

## 2. 6. 共同信仰としての精神分析——転移のジレンマ

これまでの分析によって、精神分析が、他者の視点、回顧的視点、エネルギー論的視点を代表していることが明らかとなった。それは精神分析自身が、他者理解、過去理解、準・因果的説明を不可欠の媒介としているということであり、さらには自己理解の過程一般がそれらの媒介を必要としているということでもある。《よりよい生への期待と他者への信頼に支えられて、特定の文化的状況の内部で、何らかの知識を有した他者に、不透明さを孕んだ自らの生の所産を解釈してもらうこと、そして解釈を受け入れ、新たな自己理解を得ること》、そのことによって主体は自由を回復することができる。

ところで神経症の患者は、患者であることの論理的帰結として、自らの無意識を知ることができない。また多くの患者は理論や方法について分析家と意見を戦わせることができないだろう。では患者が、分析家の解釈を受け入れるのはなぜなのか。解釈が矛盾していないというのは、その消極的な理由になりうる。だが転移という事態が教えるのは、分析家に対する愛や信仰が解釈を進んで受け入れさせているという可能性である。分析家の権威を受け入れているからこそ、その解釈がもっともらしく聞こえ、解釈を受け入れる気になる。ここからは《解釈学的・精神分析的事実とは、分析家と患者のあいだで成立する共同幻想にすぎないのではないか》という疑いが生じてくる。

それでも、この疑いによって精神分析の実践としての存立が危うくならないのは、解釈を受け入れたとき、そのことが治療効果（予想された行動の変化）を生み出すからであった。『意志的なもの』において、リクールは精神分析が治療効果をあげている限りにおいてそれを承認するという態度を採り、さらに治癒が理論を確認すると述べていた。しかし、転移とい

う事態は精神分析に対してより深刻な疑義を提起する。転移は、分析家への愛によって、もしくは患者の愛を利用する分析家の誘導によって、患者の行動の変化が生じているという可能性を示唆するからである。リクルールは、科学哲学者たちによる精神分析批判を要約する際、そのような問題があることに言及している。

精神分析は「客観性」の要求を満たすことができるような状態にはない。そのデータは、分析家と被分析者のあいだにある固有の関係と不可分だからである。対照の手続きや統計的調査が欠けているために、解釈者によって解釈が事実には押しつけられているのではないか、という疑念を取り除くことができない。しかも、治療効果に関する精神分析家の主張は、検証という最も初歩的な規則すら満たしていないのである。[D1339]

たとえ無意識に関する事実が、理論や解釈によって構成されるものであるとしても、治療効果は観察可能であり、それらを客観的に検証する手段となりうる。行動の変化が生じなければ、抑圧された欲望が症状を引き起こすという病因論や、無意識の意識化が症状を治癒させるという治療方法は反証されるからだ（何らかの特別な事情があるのかもしれない、一度の失敗で理論全体が棄却されることはないだろうが）。だが治療効果が認められるとして、そのことによって精神分析が直接的に確証されるわけではない。治癒の成果は、理論としての精神分析を正当化するとは限らず、精神分析に関係する何かが行動の変化に相関していることを確証するだけである。このとき治療効果が、理論が導き出す原因（抑圧されている欲望の意識化）と別の原因によって引き起こされているとすれば、その事実は精神分析の理論を確証するどころか、それが反証される確率を高めることになるだろう。転移という事態が示唆するのは、まさしくそのような可能性である。過去に関する解釈は、それがどのような理論にもとづいていようと、愛する人間によって語られるのならばもっともらしく聞こえ、患者の心的現実性に働きかけて、患者の未来への期待を変化させるのかもしれない。《鯛の頭も信心から》と言われるように、信仰が

自発的に行動の変化を引き起こし、その原因が誤認されることによって、信仰対象の権威が確証される。精神分析の理論は、自らの指定する原因とは異なる原因によって行動の変化が生じているのにもかかわらず、その変化をもって理論や解釈が確証されたと主張する誤りを犯していることになる。

以上のような疑義を受けて、実際に治療効果の原因について検証を行い、精神分析を理論として客観的に正当化する（否定する）ことを目指すという道もある。だがリクルールが向かうのはそのような方向ではない。精神分析は観察科学としては存立不可能である、無意識は実在しないと結論を先取りしたうえで、精神分析を歴史的・解釈学的実践として再定式化することにより、その延命を図る。ここではエネルギー論の観察科学としての正当性は問題とされず、文化的で対話的な状況内での解釈と、その受け入れによって患者の自由が拡大するかどうか最大の関心事となる。

しかし解釈学的再構成を通じて精神分析を延命させるとき、治療法としての精神分析の固有性や必然性は宙ぶりにされ、エネルギー論はただの添え物になってしまう。しかも理論が科学的に正当化されていないとしてもかまわないのだとすれば、エネルギー論は前世の理論とその地位と役割において変わるところがなくなってしまうだろう。分析家は、過去をめぐる対話が患者にもたらす効果に関して、その原因やメカニズムを、理論をあてはめて再記述しているだけである。したがって解釈学的再構成は《精神分析的事実とは、分析家と患者のあいだで成立する共同幻想にすぎないのではないか》という疑いを取り除くことができない。精神分析の理論としての有効性を信じる者たち——治療効果は理論が説明するメカニズムで生じていると信じる者たち——のあいだでのみ、精神分析の理論としての有効性が担保されることになる。解釈学的再構成は、非科学性によって精神分析を否定することはないとしても、精神分析の必然性と固有性を（科学的に見れば誤解にもとづいた）共同信仰によってのみ正当化することなのである。

『試論』のリクルールは、精神分析を分析家と患者の共同信仰によって正当化することが問題であるとは考えていない。それはリクルールが、自己理解が孤独な主観性の領域から間主観性の領域へと移行することに価値を見いだしているからだだろう。

リクルールにとって重要なのは、他者の媒介によって、自己理解のナルシスティックな反復から抜け出ることができるという点である。それゆえ解釈が共同の信仰によってのみ正当化されることが喫緊の問題とはされなかった。

ただしそれは、自己理解の解釈学という観点から見ると、間主観的領域における——他者や文化を媒介した——自己理解の客観的妥当性を問う方策を、『試論』のリクルールが持ち合わせていないということでもある。自己理解の解釈学は、自己理解を媒介する知の性格や内実に関して何の条件も設けていない。

だが既に予告したように、一九七〇年代に入ると説明と理解の弁証法が解釈学に導入される。科学的説明の導入は、『試論』における精神分析の解釈学的再構成と衝突せずにはないだろう。精神分析論において、説明と理解の弁証法はどのように処理されるのだろうか。次節では、その点を「証明」論文において確認することにした。

### 3. 「証明」論文における精神分析論

『意志的なもの』以来、原因の説明と理由の理解という二つの言説体制の両立不可能性を主張し続けていたリクルールは、一九七七年の論文（「説明と理解」）において「人間の現象は、説明づけられることを求めるが理解されることは求めない因果関係と、純粹に合理的な理解に属する動機づけとの間に位置する」[EC 171]と述べ、「我々は説明と理解の二分法にきっぱりと背を向ける」[EC 174]と言うようになっている。

さらに、七〇年代に展開されたテキスト解釈論では「批判」の役割を担うものとして構造分析の必要性が言われ、同時期のイデオロギー論においても「科学とイデオロギーの弁証法」が言われるようになる。「批判」ということで問題にされたのは「本質的に主観的で間主観的な領域のうちでいかにして客観性を獲得するか」[CH 91]ということであった。

七〇年代に導入された「説明と理解の弁証法」において、科学的説明を媒介することが理解の過程に与えるものとは、因

果的説明および客観性である。この弁証法の導入は精神分析論とも密接な関わりを有している。実際、我々は一九七七年に発表された論文「フロイト精神分析における証明の問題」のうちに、因果的説明と客観性をめぐる思考の変化に対応した、二つの大きな変化を見いだすことができる。精神分析の解釈は物語の制作であるという考え方の導入と、精神分析の解釈を確証するための基準の提示である。因果的説明をめぐるリクールの論述から確認していくことにしよう<sup>(17)</sup>。

### 3. 1. 物語制作としての解釈における因果的説明

「証明」論文のリクールは、精神分析的事実について従来の論述を引き継いだ上で（精神分析の解釈とは意味の問題であり、転移に支えられ、心的現実性に働きかける）、「分析の状況は主体の経験のなかでストーリーや物語に組み込むことのできるものを選択する」<sup>〔Op 253〕</sup>と述べ、精神分析的事実の構成における「物語」の役割を指摘している。つまり物語構造のなかで意味づけられるのが精神分析的事実であり、物語構造の外部では精神分析的事実は成立しない。このとき本論文にとって重要であるのは、解釈が物語制作として再定式化されることが、解釈過程への因果的説明の導入と連動していることである。リクールは「自己理解の解釈学は因果的説明という迂回を経ねばならない」<sup>〔Op 264〕</sup>「因果結合は理解の過程において説明を行う部分である」<sup>〔Op 267〕</sup>と述べ、理解を物語全体の理解として、説明を物語理解に統合される部分としてとらえようとしている。物語という言葉の単位が、理由のディスクールと原因のディスクールの統合を可能にしているわけだ。物語構造が説明と理解の統合を可能にするという考え方については、とりあえず措くことにしよう<sup>(18)</sup>。精神分析の解釈を物語制作としてとらえるという発想において、準・因果的説明の「準」が削られていること、さらに因果的説明が解釈の前提としてではなく、解釈そのものを構成する作業としてとらえられていることが看取される。リクールは、精神分析の解釈における動機づけと因果的説明の関係について、次のように述べている。

不調和を縮減するという試みが、動機と原因を区別することを許さない。なぜならこの試みは、動機の観点から理解するために原因による説明を必要とするからである。精神分析の事実、テクストのカテゴリ、すなわち意味のカテゴリと、エネルギーと抵抗のカテゴリ、すなわち力のカテゴリの双方から生成するものであると言ふことによって、私はこのことを言い表そうとしているのである。つまり、たとえば、感情が無意識であると言ふことは、単に《その感情は、他の状況であれば意識的なものとして生じていたであろう動機に似ている》と言ふことではなく、むしろ行動における動作の不調和を説明するために、因果的に関連する要因として無意識的感情を「物語に」挿入することが可能である、と言ふことである。[QP 263]

精神分析の解釈は簡単な動機づけの作業を超えていて、解釈には無意識の感情を説明項とした因果的説明が必要とされるということ、因果的説明の被説明項が「不調和」であることが論じられている。なぜ動機の観点から理解するために因果的説明が必要とされるのか。リクールの説明は断片的であるが、再構成を試みることにしよう。

「証明」論文でも、動機づけについて「ある人が嫉妬から行動したと言ふことは、その人の特定の行為に関して、ある特徴を引き合いに出すこと [QP 269]」であると言われている。したがって《動機の観点からの理解》が、行動を何らかの動機概念が持つ行動図式に包摂する作業としてとらえられていることに変更はない。このとき『意志的なもの』や『試論』では、たとえば「無意識の嫉妬」が「無意識の動機」としてとらえられ、症状行動を「無意識の嫉妬」という動機概念の図式へと包摂するのが、精神分析の解釈であるとされた。「証明」論文では、そのような考え方が——かつての自分の考え方であると明言されることはないものの——次のように紹介されている。



精神分析理論を、理由と原因の区別にもとづいて再定式化することができようか。ある論者たちは、そのような再定式化は可能であると考え、(意図や動機などの)行為に関する語彙を、我々が自分のしていることを自覚していない場合においても拡大的に使用するのが精神分析であると解釈した。このような解釈に従えば、日常言語において用いられているのと同じ概念を、精神分析は「無意識」と特徴づけられる新たな領域においても使用するというだけであって、日常言語の概念体系そのものにはいかなる変更も加えないということになる。したがって、たとえば、フロイトが分析した鼠男については次のように言われる。「彼は父親に対する敵対感情を自覚することなく抱いていた」。敵意という語が、その日常的な意味——主体がそのような感情を自分自身が抱いていると自認できるような状況において敵意ということが言われるときに、敵意という語に与えられている意味——で用いられているからこそ、このような主張は理解可能である。そしてこの主張の新しいさは、それが「自覚することなく」「知らず知らずのうちに」「無意識のうちに」などのフレーズを用いているという点にもっぱら由来する。[QP 262]

本人が気づいていないが、その人の行動が「嫉妬」に包摂されるような特徴を有しているとき、我々は「その人は自分では気づいていないが、嫉妬している」と言う。引用における論者たちは、このような本人には自覚されていない動機を「無意識の動機」としてとらえようとしている。このとき「無意識の動機」という言い方を正当化しているのは次のような論理である。すなわち行為の動機や意図とは、行動を公共的な類型へと包摂することによって理解されるのであり、行為主体の心のうちにある私秘的な過程を観察なり推測することによって理解されるのではない<sup>(19)</sup>。一人称的視点からの動機理解と、三人称的視点からの動機理解には本質において異なるところはない。本人が見落としている行動や、動機語の図式についての無知ゆえに、二つの視点のあいだで理解に違いが生じることとはあるだろう。無意識の動機とは、三人称的視点からの動機理解を、当の行為主体が自覚していなかったときに言われることである。

しかし、「無意識」という語と「無自覚」という語は、実際には同じものではない。そのことは、同様の考え方を神経症などの病的症状に適用することはできないという事実によって説明される。

仮に症状から無意識の嫉妬を読み取ることができたとしよう。上記の立場からすれば、症状全体が「無意識の嫉妬」という動機に包摂されることになる。言い換えれば、「無意識の嫉妬」という動機は、まさしく症状が表しているような行動のパターンをその図式として持つということになる。だがこのとき、「無意識の嫉妬」という行動図式に包摂される行動（症状）と、「嫉妬」の行動図式に包摂される行動は全く異なっている。「嫉妬」という動機に関係するような現実の行動は、症状のうちには認められない。しかも「嫉妬」が動機である場合、包摂される行動は相手の名誉を傷つけるという目的を実現するための手段として理解することができが、「無意識の嫉妬」の場合、そこに包摂される行動は、そのような意図を実現するための手段として理解することができない。むしろ症状はそのような意図の実現が妨げられた結果である。それゆえ、仮に無意識の嫉妬が患者を動かしているとしても、そこから症状の全体を「無意識の嫉妬」という動機へと包摂してしまうことには無理がある。「嫉妬」という動機を与えられるべき行動がどこにも存在しないからだ<sup>20</sup>。

「無意識の欲望」ということで問題になっているのは、目に見えている行動が別様に意味づけられるということではない。無意識の欲望が語られるとき、分析家の目の前にあるのは、どのような動機にも直接包摂することができない非合理的な行動である。動機づけが、その特徴にもとづいて行動を何らかの動機へ包摂することであり、何らかの目的に向けられたものとして行動を再記述することであるというとき、症状はそのような再記述を受けつけない。リクルが本項冒頭の引用において「行動における動作の不調和」と言っているのは、動機への単純な包摂を許さない非合理的な行動のことである。

精神分析は、そのような非合理的な行動（症状）を欲望と欲望の葛藤の結果（自我欲動と性欲動のあいだの葛藤の結果）として説明する。諸々の欲望の葛藤の結果、妥協形成的に特定の症状が発現した。だからこそ、発現した症状はいかなる単一の動機にも包摂することができない。無意識の欲望とは理解不可能な行動を生じさせた原因（の一つ）であり、そのよう

な原因を持ち出すことによって、行動を単一の動機へ包摂することができない理由が明らかにされ、不調和＝非合理が縮減される。「動機の観点から理解するために原因による説明を必要とする」という一節が言わんとしているのは、このような解釈の過程だろう。

以上の再構成から、「証明」論文では、二つの言説体制の併用が容認されることによって、非意志的な動機という奇形的概念が解消されていることが明らかとなった。動機とは、あくまで現実に遂行された行動についてその意味として与えられるものであって、動因としての欲望とは区別されなければならない。嫉妬という欲望が動機として認められるのは、それが抑圧されずに主体を動かした場合であり、この場合に行動は嫉妬という動機に包摂されることになる。他方、無意識において嫉妬の欲望が働き、それが症状を引き起こしているのであれば、症状を嫉妬の図式に包摂することができない以上、その欲望を動機と見なすことはできない。そのように見なすならば、あらゆる欲望が動機ということになってしまう。精神分析の動機づけ説は、他の欲望とともに症状の原因として特定された無意識の欲望を、むりやり動機とみなすことによって（本項冒頭の引用にあるように、無意識の感情を「他の状況であれば意識的なものとして生じていたであろう動機に似ていると言う」ことによって）、解釈を理解の系に引き寄せる。だがそれは「動機」という概念の足下を掘り崩すことでしかない。動機とは行動全体に対する（一人称的視点ないし三人称的視点からの）意味づけであり、行動を引き起こしている原因の一つをとりあげて、それに行動全体の意味を担わせるのは、端的に動機づけとして誤りである。

### 3. 2. 精神分析における解釈の確証基準——精神分析論のジレンマ

リクルールは「証明」論文において、「無意識の動機」という概念を見直すことにより、精神分析の解釈過程に因果的説明を導入するに至った。因果的説明は物語のユニットであり、それらが組み合わさり、連なっていくことによって物語が構成される。そしてこの物語が一つの全体として、理由や動機についての理解を与えるとされるのである<sup>(2)</sup>。最終的に次のよ

うに言われる。

物語ることが説明となりうるのは、物語の語「『理由の言説体制』で組み立てられた自己理解の過程のうちに、段階を追って因果的説明が挿入される場合である。そして、このように説明を迂回することが、非物語的な立証の手段に訴え<sup>26)</sup>を正当化する<sup>27)</sup>。[QP 268-9]

ここで「非物語的な立証の手段」とは、ヘンペルが言う「演繹的・法則的モデル」ないし「被覆法則モデル」による説明のことである<sup>28)</sup>。このモデルでは、ある出来事の説明とは、初期条件と普遍的法則からその出来事を演繹することであるとされる。たとえば結果としての出来事を、因果法則と結果に先行する出来事から演繹するのが因果的説明である<sup>29)</sup>。それゆえ各ユニットにおける原因帰属の正しさは、当然ながら、出来事の記述の正しさやそれが用いている法則の正しさに依存することになる。

ところが、精神分析には、症状発生に関する因果法則である抑圧仮説が確証されていないという問題がある。既に述べたように(第二節第六項)、フロイトは、症状の変化がまさしく抑圧された欲望の意識化によって生じていることを検証していないからである。むしろ行動の変化は、理論が指定する原因とは異なる原因によって生じている可能性が高い。実験や対照を通じて治療原因に関する客観的検証を行ったとき、精神分析の抑圧仮説は誤りとして棄却されるおそれがある。それにもかかわらず、フロイトは行動の変化だけをもって、精神分析の理論・解釈・事実が確証されたと主張している。

『試論』のリクルールは、そのような棄却可能性を先取りし、その正当性を間主観的領域における諸個人の承認に委ねることによって、精神分析の延命を図った。したがって因果的説明が解釈作業を構成するものとしてとらえられるようになったとしても、「証明」論文において、リクルールが因果的説明に観察科学的な検証を要求することはない。抑圧仮説とそれに基

づいた因果的説明は、分析家と患者の信仰によって正当性を認められてよい。

これに対し、「証明」論文のリクルールは、精神分析の存立を共同の信仰に依存させることの問題に気づいている。リクルールは次のように論じているからだ。

認識論的敗北主義に屈するのは正しくない。そうすれば、治療の上で効果をもたらすのは、説明が患者にとって受け入れ可能であることだという口実のもと、精神分析の言明を説得のレトリックとしてしまうことになる。このとき、分析者による教唆という繰り返される疑いのほかに——フロイトはこの疑いと戦い続けた——、次のようなより深刻な疑いが加わることになる。すなわち、治療の成功条件は、所与の社会環境に適応する患者の能力でしかないという疑いである。この疑いはつづいて次のような疑いへとつながっていく。つまり、精神分析家は患者との関係において、結局社会の観点を代表しているにすぎないのではないか、そして精神分析家は自分だけがその鍵をにぎっている降伏の戦術に患者を巧妙にまきこむことによって、患者に社会の観点を押しつけているという疑いである。[QP 268]

引用において取り上げられているのは、分析家は説得や誘惑の技法を駆使して、患者が特定の「社会の観点」を受け入れるように操作しているのではないかという疑念である。たとえば、パラノイアは同性愛的欲望の抑圧によって生じるとされるが、社会が同性愛を抑圧するからこそ、個人による同性愛的欲望の抑圧が生じると考えることができる。だが分析家は、社会規範そのものを変化させることには目を向けない。それどころか分析家は、患者の抑圧された欲望を《異常》とみなし、欲望を完全に抑圧できるように患者の自我を訓練しているのではないか。精神分析とは社会変革の萌芽としての症状を巧みに摘み取り、社会的抑圧の再生産に寄与する技法にすぎないのかもしれない。この技法によって患者の行動が《正常》化したとして、それを回復と呼ぶことができるのか。引用が言及しているのはこのような疑念であろう。

このような疑問を取り上げるリクールの論述の背後に、同時期に導入されたイデオロギー批判という問題関心が存在していることは明らかだろう。ではどのようにすれば、精神分析はイデオロギー的抑圧に加担せずに済むのか。分析家の倫理に訴えるだけではなく、《治療》の定義を見直す、解釈の客観的な確証基準を設けるなどの対策が求められるはずである。

ところが確証基準として観察科学の確証基準を採用することはできない。正当化の手段として科学的検証を導入すれば、精神分析の営みは存立の基盤を失ってしまうということが、リクールの議論の前提となっているからだ。リクールはそのことをよくわかっている。だからこそ、リクールは科学的検証を要求すべきまさにその地点において、ハイデガーを召喚し、まずは精神分析の非科学性を擁護しようとする。

ハイデガーは解釈学的循環を指して、課題となるのは循環を回避することではなく、循環のうちに正しく入り込むことであると言った。対策を講じさえすれば、循環は悪循環ではないということだろう。[QP 271]

精神分析には「自分で自分を確証している self-confirmation [QP 270]」という循環が認められる。それはたとえば《理論が現象の記述を可能にし、記述の成立が理論の正しさを確証する》という循環であり《理論の信奉が治療効果を引き起こし、治療効果が理論を正当化する》という循環である。このような循環は科学的に見れば「悪循環」である。理論から独立して得られる、客観的な観察データによる反証を受けつけないからである。だがそれでも解釈学的に見れば循環は避けられない——認識は先行理解や期待があつてはじめて可能となる——のであり、科学的視点からそれを悪循環と非難することはあたらない。むしろ先人見から離れた客観的認識という考えのほうが幻想である。それゆえ課題となるのは、循環の内部にとどまりつつ、循環の内部で循環を引き起こす問題を解決することだ。リクールはこのように考えることによって、精神分析を擁護しようとしている。では問題を解決する「対策」とは具体的にどのようなものだろうか。リクールは次のように続ける。

立証の循環は、次のような場合、悪循環ではないだろう。それは複数の基準にもとづいた確証の相互強化によって、確証が累積的な仕方で行われる場合である。すなわち、一つの基準における確証はそれだけを取ってみれば決定的ではないとしても、複数の基準による確証の結果が一致していることが、それぞれの確証を妥当なものとし、うまくいけば確からしく、さらには納得のいくものにしてくれるという場合である。[QP 271]

ここで言われているのは、精神分析が循環から脱することができるということではない(そうであれば、わざわざハイデガーを召喚する必要などないだろう)。リクルールが言わんとしているのは、立証の循環を前提としたうえで、解釈なら解釈、治療なら治療の成功を個別に判断する基準を設けることにより、循環が悪循環に陥るのを防ぐことができるということである。言い換えれば、解釈もうまく行っていて、治療もうまく行っているのならば、精神分析の営みは全体としてうまく行っていると判断してもよく、全体がうまく行っていることが解釈や治療の正当性を裏づける。そしてリクルールはそのような独立した基準として、次の四つの基準を挙げる。すなわち、《よい精神分析の説明は、理論と整合しなければならない》、《よい精神分析の説明は、内的一貫性を有していなければならない》、《よい精神分析の説明は、治療を可能にしなければならない》、《よい精神分析の説明は、物語としての理解可能性を有している》という基準である<sup>(14)</sup>。

それでは、このような基準を設けることによって解決する問題とは何だろうか。なるほど、リクルールは二つの解釈があるときに、理論とより適合的で、内的整合性のより高い解釈のほうが《よい》解釈であると言いたいのだろう。《内的に矛盾を抱えた説明は、悪い説明である》、《治療に成功しない説明は、悪い説明である》と言って、たんに精神分析の存立の必要条件を繰り返しているわけではないはずだ。だがこのように言うとき、諸基準が満たされることによって回避される「悪循環」とは、説明の失敗や破綻でしかない。解釈の矛盾や治療の失敗が生じているのにもかかわらず、精神分析の解釈の正しさを信奉することが「悪循環」とされているわけである。



しかしこれは問題のすり替えである。イデオロギー的抑圧の問題というのは、精神分析の解釈が矛盾なく成立し、治療が成功すれば解決する問題なのではない。むしろイデオロギー的抑圧の問題は、精神分析が科学的に検証されない信仰の実践である限りにおいて、いつまでもつきまとう問題である。すなわち問題となっているのは、《よい精神分析の説明は、治療を可能にしなければならない》という基準を設けたとして、そこで言われる《治療》がイデオロギー的抑圧に結びついているという可能性なのだ。それゆえ《よい精神分析の説明は、治療を可能にしなければならない》という基準を設けることによって、問題がいささかなりとも改善するわけではない。リクールは病的行動の改善を治療の成功とみなすことを考え直しているわけではなく、また現実には精神分析の説明が矛盾なく成立し、その治療が成功を収めていることを立証しているわけでもない。したがってリクールは、精神分析は「患者に社会の観点を押しつけているという疑い」から解釈学的精神分析を救い出すことに失敗していると言わざるを得ない。リクールは自然科学的な確証基準を精神分析に導入することなく、精神分析を間主観的な承認によって正当化した。しかしそのことは、精神分析がイデオロギー的抑圧に加担しているという疑いを前にして、解釈学的再構成が有効な応答をすることができないという問題を引き起こしているのである。

## 小結

精神分析論の文脈では、「説明と理解の弁証法」が意味するのは因果的説明の導入にとどまり、科学的な検証の導入は最後まで求められなかった。自然科学的観点からは正当化されえない理論であるとしても、リクールは精神分析を承認しようとする。この承認は、精神分析がイデオロギー的抑圧に加担しているという疑いを前にしても変わるところがない。科学的に間違った理論が、その理論を信奉する者たちを抑圧しているかもしれないとき、そしてその抑圧から逃れる方策をその理論が持ちえないとき、なぜリクールは精神分析を拒絶することを選ばないのか。

とりあえず精神分析論が自己理解の解釈学の鏡であり、解釈学的再構成が精神分析を自己理解の解釈学化する作業であったことを思い出すべきだろう。リクールは精神分析を次のような過程として再構成していた。《よりよい生への期待と他者への信頼に支えられて、特定の文化的状況の内部で、何らかの知識を有した他者に、不透明さを孕んだ自らの生の所産を解釈してもらう》という過程である。この過程をくぐり抜け「この過去において自己認識する」ことにより、心的現実性に変化が生じ、未来について新たな期待が生じる。それは同時に孤独な主観のナルシスティックな自己理解が更新され、他者とともによりよく生きることができるようになるということでもある。リクールは精神分析を、自然と他者とともにある主体の自由を回復させる過程として承認したわけである。それゆえ精神分析とイデオロギー的抑圧の問題は、共同体において流通し、他者たちが信奉している知が、虚偽や誤認を含んでいるという問題として把握されなければならない。精神分析論のジレンマとして見いだされたのは、特定の共同体における世界理解——それは結局、共同体の自己自身についての理解ということである——が、幻想であるという問題なのである。

したがって、問うとすれば、我々は次のように問わなければならない。なぜリクールは共同体の素朴な自己理解を科学によって批判し、イデオロギーから抜け出ようとしなかったのか、と。イデオロギー論（『科学とイデオロギー』一九七四年）における次のような一節に、その理由を見いだすことができるだろう。それは「イデオロギーについての非イデオロギー的言説は、象徴化以前の社会的現実に達することの不可能性につきあたる『S1321』という一節である。我々はイデオロギーから手を切って、なまの現実に出会うことはできない。次のように言ってもよいかもしれない。仮に科学によってイデオロギーの覆いを引き剥がし、客観的で抽象的な現実を明らかにすることができたとして、そのことが「社会」の諸問題を解決することになるのか、と。『イデオロギーは社会的存在のこえがたい現象『S1314』であり、イデオロギー批判は、イデオロギーの内部で、イデオロギーの作用を受けつつなされるほかない。リクールはそうように考える。

このことは、必ずしも科学的説明による批判を排除するものではない。おそらく科学的説明をどのような状況においてど

のように導入するかということは、場合に依じて、首尾一貫しない仕方では決められるべき問題なのであろう。リクールはテクスト解釈の文脈において「説明と理解の弁証法」を論じるとき、確からしい理解の基準を網羅性と調和に求めつつ<sup>25</sup>、さらに科学的説明として構造分析を導入している。共同体の素朴な理解が第二の素朴さへと到達するための批判として、自然科学が有効である場合もあるはずだ。しかし科学がイデオロギーを破算に追い込もうとするとき、リクールとしてはそのことを認めるわけにはいかない。精神分析論の議論を袋小路に追いやっているのは、リクールのそのような姿勢なのである。そしてグリュンバウムの厳しい批判が看過していたのもまた、リクールのそのような姿勢にほかならない。

イデオロギー批判をめぐるリクールの思考の再構成を今後の課題とし、本稿の議論を終えることにしよう。

## 文献

- Grünbaum, Adolf. 1984 *The Foundation of Psychoanalysis : A Philosophical Critique*, University of California Press. (アドルフ・グ  
リュンバウム『精神分析の基礎——科学哲学からの批判』村田純一・伊藤笏康・貫成人・松本展明訳、産業図書、  
一九九六年)
- Freud, Sigmund. 1916-7 *Vorlesungen zur Einführung in die Psychoanalyse*, *Gesammelte Werke*, Bd. XI, S. Fischer Verlag, Frankfurt  
am Main, 1998. 『精神分析入門講義』『フロイト全集15』新宮一成訳、岩波書店、二〇一二年)
- Ricœur, Paul. 1950 *Philosophie de la volonté I : Le volontaire et l'involontaire*, Paris, Aubier, 1988. (『意志的なものと非意志的な  
ものⅠ・Ⅱ・Ⅲ』滝浦静雄・箱石匡行・竹内修身訳、紀伊國屋書店、一九九三―一九五年) [VI]
- 1960 *Philosophie de la volonté 2 : Finitude et culpabilité II : La symbolique du mal*, Paris, Aubier. (『悪のシンボリズム』植島  
啓司・佐々木陽太郎訳、溪声社、一九七七年)、『悪の神話』一戸とおる・佐々木陽太郎・竹沢尚一郎訳、同、一九八〇年)

[SM]

- 1963 “Structure et herméneutique”, *Le conflit des interprétations : Essais d'herméneutique I*, Paris, Seuil, 1969, pp. 31 - 63. [SH]
- 1964 “Technique et non-technique dans l'interprétation”, *Le conflit des interprétations : Essais d'herméneutique I*, Paris, Seuil, 1969, pp. 177 - 194. [TNI]
- 1965 *De l'interprétation : Essai sur Freud*, Paris, Seuil. (『フロイトを読む——解釈学試論』久米博訳 一九八二年) [DI]
- 1971 “Événement et sens dans le discours”, *Paul Ricoeur ou la liberté selon l'espérance*, ed. par M. Philibert, Paris, Seghers, 1971, pp. 177 - 187. (『言説における出来事と意味』久米博訳『解釈の革新』白水社 一九七八年) [ESD]
- 1971 - 2 *Herméneutique* [cours professé à Louvain, 1970 - 1], Institut Supérieur de Philosophie. [CH]
- 1972 “La métaphore et le problème central de l'herméneutique”, *Écrits et conférences 2 : Herméneutique*, ed. par Daniel Frey et Nicholas Stricker, Paris, Seuil, 2010, pp. 91 - 122. (『隠喩と解釈学の中心の問題』清水誠訳『解釈の革新』白水社 一九七八年) [MPCH]
- 1974 “Science et idéologie”, *Du texte à l'action : Essais d'herméneutique II*, Paris, Seuil, 1986, pp. 303 - 331. (『科学とイデオロギー』久米博訳『解釈の革新』白水社 一九七八年) [SI]
- 1975 “La fonction herméneutique de la distanciation”, *Du texte à l'action : Essais d'herméneutique II*, Paris, Seuil, 1986, pp. 101 - 117. (『疎隔の解釈学的機能』久米博訳『解釈の革新』白水社 一九七八年) [FHD]
- 1976 *Interpretation Theory : Discourse and the Surplus of Meaning*, Texas Christian University Press. [IT]
- 1977 “Expliquer et comprendre”, *Du texte à l'action : Essais d'herméneutique II*, Paris, Seuil, 1986, pp. 161 - 182. (『説明と理解』久米博訳『解釈の革新』白水社 一九七八年) [EC]
- 1977 “The Question of proof in Freud's writings”, *Paul Ricoeur : Hermeneutics and the Human Sciences*, ed. by John B.

Thompson, Cambridge University Press, 1981, pp. 247 - 173. [QP]

—— 1983 *Temps et récit I : L'intrigue et le récit historique*, Paris, Seuil, 1991. (『時間と物語Ⅰ』久米博訳、新曜社、一九八八年)  
[TRI]

—— 1985 *Temps et récit III : Le temps raconté*, Paris, Seuil, 1991. (『時間と物語Ⅲ』久米博訳、新曜社、一九九〇年) [TRIII]

—— 2008 *Écrits et conférences I : Autour de la Psychoanalyse*, ed. par Catherine Goldenstein et Jean-Louis Schlegel, Paris, Seuil.

Ryle, Gilbert. 1949 *The Concept of Mind*, Penguin Books, 2000. (『心概念』坂本百大・宮下治子・服部裕幸訳、みすず書房、一九八七年)

川口茂雄 2012 『表象とアルシーヴの解釈学——リクルールと『記憶、歴史、忘却』』京都大学学術出版会

櫻井一成 2012 「物語と企投としての自己理解——リクルールの『経験の前—物語的構造』概念をめぐって——」『美学芸術学研究』第三〇号

—— 2014 「人間の自由と物語——『意志的なものと非意志的なもの』と『時間と物語』の交叉的読解を通じたリクルール哲学の研究」『美学』第二四二号

## 註

(1) 二〇一〇年には第二集『解釈学』が、二〇一三年には第三集『哲学的人間学』が出版されている。

(2) 『試論』の冒頭で「論述の対象はフロイトであって精神分析ではない [DI7]」と明言されていることからわかるように、リクルールにとって精神分析とはフロイトの精神分析である。本論文では、精神分析という語をフロイトの精神分析を指すものとして用いることにする。

(3) 『試論』に対して与えられた低い評価もまた、この空白に関わっているのだろう。二十世紀後半のフロイト受容に決定的な影響を与えたラカンによって、リクルールの『試論』は意図的に黙殺され封殺されてしまった。リクルールの精神分析論が、フロイトの後継者や精神分析理論の展開に何かをもたらすことはなかったのである。またリクルール研究者の川口茂雄氏の報告によれば、リクルール自身が『試論』を不十分な論考として評価し、長くポケット版化を拒んでいたということである[川口29]。『試論』を骨折って精読したところで、フロイト理解に関する重要な知見が掘り出されてくるとは思えないし、関心を持って受け入れてくれる人がいるとも思えない。このような事情もあって、リクルールの精神分析論は不人気である。ただし心理療法や質的研究におけるナラティブ・アプローチの隆盛に伴って、精神医療の分野でリクルールの「ミメシスの循環」論や「物語的自己同一性」概念に注目が集まっているのも事実である。新たな論文集の第一集が「精神分析」であったことは、このような事情を反映しているのかもしれない。

(4) 『精神分析の基礎』において、グリウンバウムは先行するフロイト批判(ハーバーマス、リクルール、ポバーなど)に再批判を加えた上で、フロイト精神分析が科学理論として抱えている真の問題点(治療の成果がプラシーボ効果によるという疑念を払底できておらず、病因論が十分に確証されていないこと)を別出している。『精神分析の基礎』は、精神分析の科学哲学的研究として既に名高い著作であるが、リクルールのフロイト受容の問題点を論じた数少ない著作でもあり、その記述からは教わる人が多い。「説明と理解の二分法」をめぐるリクルールの思考の通時的变化に関して、本論文はグリウンバウムの議論に多くを負っている。たとえばグリウンバウムは、「証明」論文に触れて、「リクルールが後の著作で考えを改めたことは歓迎しなければならないし、動機と原因の二分法を伴った日常言語学派的アプローチをフロイトの説明に持ち込むのを拒絶したことは、十分評価に値する[Grünbaum 73]」と述べている。

(5) リクルールは主体の統治を受ける身体を「主体身体」と呼び、因果的必然性の支配のみを受ける身体としての「客身体」と区別している[ML5]。意志作用が自然の秩序へと参加することができるのは、主体の所有物である一方で、

自然にも属しているという「主体身体」の二義性によっている。

(6) 人間的自由の実現と自己理解の関係については「櫻井2014」を参照されたい。

(7) ただし、『私』に対する承認は全面的なものではない。リクルールによれば、行為の可能性は運命によって隅々まで決定されているわけではなく、運命に開き直るのは「怠惰さ」への口実でしかない〔VI 326〕。リクルールにとって、過去世理解はそれ自身を目的としているのではなく、つねに自己制作の自由へと向けられている。

(8) 「対立する二つの力が、症状において再び合流し、いわば症状形成という妥協を通じて和解に至ります。だからこそ、症状には、治療に対して大変強い抵抗力を持つという側面があるわけです」〔Freud 373〕。

(9) 「精神分析の治療の課題について、それは病因に関する無意識を意識に置換することであると定式化することができます。次のように言うと、驚かれる方もおられるかもしれませんが、この定式は、治療の課題とは、患者の記憶の欠損を埋め、その健忘を解消することであるという別の定式によっても言い表すことができます」〔Freud 292〕。

(10) つまり意志作用と動機は「動機は、意志が意志自身をそれに基礎づける場合にのみ、その意志を基礎づける。動機は、意志が意志自らを決定する限りにおいて、意志を決定する」〔VI 65〕という関係に立っている。

(11) もともと信仰と懐疑の弁証法は『悪の象徴系』（一九六〇年）において導入されたものであり、『試論』と同様の記述をその結論部に認めることができる〔SM 332-332〕。つまりリクルールは、宗教学的文脈において導入された弁証法を、精神分析論に持ち込んでいるわけである。それゆえ信仰と懐疑の弁証法は自ずと多義的となる。

(12) 一九七〇年代に展開された詩的言語の解釈学でも、同様の発想が展開され、たとえば一九七五年に書かれた論文の中では「文学がそれを言語化し、分節してくれていなかったとすれば、愛や憎しみについて、倫理的感情について何を知らることができるだろう。通常「自己」と呼ばれているものすべてに関して、何を知ることができるだろう」〔FHD 116〕とされている。



(13) たとえばリクールは「意味によって統御される解釈学は、その全行程の一部として、構造分析や記号論的分析のような、客観化する手続きを必然的に取り込む [ESD 186]」と主張している。

(14) 構造主義的説明についても「構造主義は距離をとること、客観化すること、研究者の個人差から制度や神話や儀式的構造を切り離すことを目指す [SH33]」と言われている。

(15) リクールは「証明」論文（一九七七年）で、「動機とされるもの——たとえば嫌悪や嫉妬——は特定の出来事ではない。それは傾向性のクラスであり、このクラスに包摂されることによって特定の行為は理解可能なものとなる [QP 269]」と述べている。傾向性概念はおそらくギルバート・ライルに由来するものであろう。ライルは傾向性について「ある傾向性をもつということとは、ある特定の条件が現実化したときには、必ずある特定の状態におかれるか、その状態におかれる見込みが高いということである。あるいは、そのようなときには、必ず特定の変化を被るか、そのような変化を被る可能性が高いということである [Ryle 43]」と述べている。『試論』の議論を考察する段階ではあるが、齟齬をきたさないと判断し、「証明」論文と、そこで参照されているライルの議論を援用して補足を行なった。

(16) フロイトは転移について次のように述べている。少し長くなるが引用しておこう。「患者は、分析を通じて明らかにった抵抗との正常な葛藤を戦い抜かなければならないのですが、患者はそのための強力な原動力を必要としています。この原動力が、私たちが期待するように治癒へと向かうという意味において、患者の決意に影響を及ぼすわけです。そのような推進力がないとすれば、患者はかつて生じた結末を反復することに決め、意識のうちに引き上げられたものが再び抑圧のうちへと滑り落ちていくのを是認するということになりかねません。このとき、戦いにおいて決定的な役目を果たすのは、患者の知的洞察ではなく——知的洞察はそのような役目を果たすだけの強さも自由もそなえていません——、もっぱら患者の医師に対する関係であります。陽性のしるしをともなっている限りにおいて、患者の転移は医師に権威を付与し、医師の報告と解釈に対する信仰へとかたちを変えます。このような陽性の転移が認めら

れない場合、あるいは転移が陰性である場合には、患者は医師にも医師の論証にもけっして耳を傾けることはないでしょう。このとき信仰はその発生史を反復していることとなります。信仰とは愛の蘊なのであり、あらかじめ論証を必要とするものではなかったのです。あとになってはじめて、信仰は論証の余地を認め、論証が自らの愛する人によって提示された場合に、それを検討し考慮に入れるようになるわけです [Freud 463]。

- (17) 本節（特に第二項）では、「証明」「立証」「検証」「確認」などの語が用いられることになる。これらの単語は、特定の仏語ないし英語の単語と一対一対応の関係に置かれているわけではなく、むしろ文脈に応じて使い分けられている。これらの語は、完全に区別できるものではないが、おおむね次のような意味で用いられている。すなわち、正しい手続きに従って説明を行う場合には「立証」という語が、提示された説明の正しさを三人称視点から検討する場合には「検証」という語が、その結果説明の正しさが承認される場合には「確認」という語が用いられる。「証明」という語は、これらを広く含む語として、一九七七年の論文のタイトルについてのみ用いられている。

- (18) リクルールの物語論については、「櫻井 2012」を参照されたい。

- (19) ライルは次のように述べている。「ある特定の行為の動機をある人に帰属させることは、目には見えない出来事を探し求めて因果の推論をおこなうことではなく、エピソード命題を準・法則命題のもとへ包摂するということである [Kyle 87]」。

- (20) このように言うことは、自我欲動と何らかの性欲動の葛藤が引き起こしがちな症状の類型を考えることが不可能であると言ふことではない。

- (21) 精神分析の解釈が物語構造において把握されるようになったことと連動して、歴史科学の記述についての把握も変化している。つまりリクルールは『試論』のように、歴史科学の営みをたんなる「類型」への包摂としてとらえることをやめている。そのことは、たとえば『時間と物語』における「歴史科学は物語の骨組みから、説明の過程を引き離し、

その過程を明確な問題系に昇格させる「TRI311」という一節に明らかだろう。

(22) 「証明」論文には直接の言及はないが、リクールは同時期の論文のなかでヘンペルのモデルを次のように紹介している。

「どのような場合でも、説明とは、二種類の前提の連言から一つの出来事を演繹することである。第一の前提は、初期条件の記述（先行する出来事、状況、文脈など）を含む。第二の前提は一般法則の言明、言い換えれば規則性の主張を含む。説明を根拠づけるのはこの一般法則である[EC178]」。

(23) リクールが「説明と理解の弁証法」を導入したことには、物語構造の発見や「無意識の動機」概念の見直しと並んで、因果的説明に関する被覆法則モデルの導入も関係しているはずである。なぜならこのモデルにおいて、説明項／被説明項の存在論的身分や法則の厳密性は、説明の形式そのものとは切り離して考えることができるからである。それゆえ、被覆法則モデルで因果的説明を考えることが、欲望という心的な存在者についても因果的説明を認めるという考え方を可能にしたと言いうことができる。ただし「準因果的説明」から「準」の語が削られたことが、被覆法則モデルの導入によるものだけなのかどうか、さらなる検討が必要である。また一方で、リクールは因果的説明と物理的還元主義を結びつけるような考え方をいまだに保持しており、欲望を「物」として認めるようになったという可能性も完全には否定できない。これらの点を含め、説明と理解（動機と原因）の弁証法に関する包括的な考察については、今後の課題としたい。

(24) グリュンバウムは、リクールの提示する基準について、それらがどのようにして満たされるのか「皆目見当がつかず」、その基準は「まったく使いものにならない」と批判している[Grünbaum 69]。グリュンバウムにとって、確証とは経験的検証による確証であるから、たとえば『よい精神分析の説明は理論と整合しなければならぬ』という基準が、循環しているとして批判されるのは当然である。だがリクールは循環を前提とした上で、解釈学的観点から諸基準を提示しているため、グリュンバウムの批判は的外している。

(25)

リクールは次のように述べている。「最も確からしい解釈とは、テキストが与える諸事実を、そこに含まれる潜勢的な共示も含めて、最大限考慮に入れている解釈であり、また、考慮の対象となる諸事実を、よりうまくとりまとめているような解釈である [MPCH III]」。